

アドミッションセンター

明治維新とアドミッションセンター

教育担当理事・副学長・アドミッションセンター長 清原 貞夫

今年には明治維新 150 周年。鹿児島でも各所で催し物が開かれ賑わっています。そして、西郷隆盛を主人公に、薩摩の若き群像がテレビで取り上げられ好評を博しています。その西郷隆盛等が学んでいた学校が、本学へとつながる薩摩藩校造士館であり、近代国家日本の未来を切り開いた多くの人材を輩出しました。そして、薩摩藩は薩英戦争後英国へ留学生を出す等、「進取の気風あふれる」組織でもありました。いつの時代でも人材育成は第一であり、「進取の精神」を持つ人材育成は欠かせません。



現在、鹿児島大学では、「進取の気風あふれる総合大学」を目指し、自ら困難な課題に挑戦する「進取の精神」を有する人材を育成するため、「鹿児島大学憲章」「鹿児島大学教育目標」を掲げ、学位の質保証に取り組むほか、初年次教育や「地域人材育成プラットフォーム」等の教育改革を展開しています。そうした中で、基礎学力を有し「進取の精神」の素養を持った学生を継続的に確保することを目的として、2016（平成 26）年 4 月、アドミッションセンターが設置されました。

本センターでは、本学の入学受入方針（アドミッション・ポリシー）を踏まえ、これまで入試改革を次々に進めてきました。2016（平成 28）年度入試では理系学部の個別学力試験で「英語」を新たに導入し、海外の有力大学が採用している「国際バカロレア入試」も開始しました。さらに、2017（平成 29）年度入試からは英語 4 技能による高い英語力を有した方を対象とした「外部英語試験」も全学部で希望者優遇制度という形態で導入いたしました。

そして現在、2020（平成 32）年度入試から導入する「自己推薦型入試」を検討しており、今年 3 月 28 日にその概要について記者発表を行いました。その特徴は「講義型試験の導入」にあり、学力の 3 要素で、思考力、判断力、表現力、主体性を特に重視し、「学びたい力」（本学への入学を強く希望する者）、および「学ぶ力」（大学の授業を受講できる力）を持った人材を求めています。「学びたい力」では、推薦入試に見られるような一高校からの人数制限等を設けず、本学を第一希望とする受験生が自らの意思で自由に出願できることとし、「学ぶ力」では講義型試験により、講義を主体的に聴いて要点を「キャッチ（思考・判断・理解）」し、キャッチした要点を「メモ」し、出題された設問等に文章で的確に表現する能力を評価いたします。

本センターでは昨年度、入試に関して、多面的総合的入試に関するシンポジウム、大学入試センター副所長や文部科学省大学入試室長を招いてのトップセミナー等も開催いたしました。また、2017（平成 29）年度入試において志願者数が 1300 人以上減少したことについては、志願者等の動向に関する分析を行い、その結果をトップセミナーや各学部へ報告するほか、入試直前での進学説明会参加や広告掲載など積極的な入試広報を展開し、2018（平成 30）年度入試では 1200 人を超える志願者増の達成に至りました。

本センターは、「進取の精神」の素養を持った学生を確保するという目的達成のため力を尽くして参りますので、今後ともご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

アドミッションセンター

アドミッションセンター概要

アドミッションセンターは、入学者選抜方法の改善、中長期的な入学者選抜方法の在り方の策定、入学者選抜機能の検証、学生確保に係る広報活動等を行うことにより、継続的に優秀な学生を確保することを目的として設置されました。

アドミッションセンターは、次に掲げる事項について実施します。

- (1) 入学者選抜方法等に係る調査・研究
- (2) 入学試験データの分析・評価
- (3) 学部及び研究科からの求めに応じた入試に関する助言
- (4) その他センター長が必要と認めた業務に関すること。

また、アドミッションセンターは、各学部と共同し、次に掲げる事項について企画立案及び実施します。

- (1) 入学者選抜方法の改善に関すること。
- (2) 中長期的な入学者選抜方法の在り方の策定に関すること。
- (3) 入学者選抜機能の検証に関すること。
- (4) 入学後の学業成績の追跡調査に関すること。
- (5) 学生確保に係る広報活動に関すること。
- (6) 全国的な志願者動向を踏まえた志願状況の分析に関すること。
- (7) その他センター長が必要と認めた業務に関すること。

調査・研究について

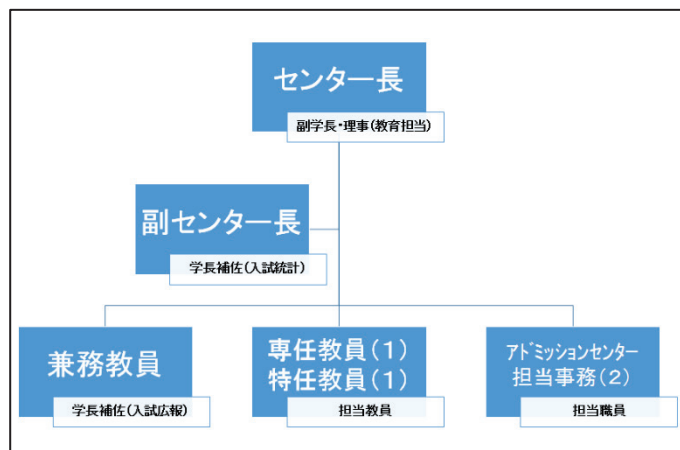
アドミッションセンターが行っている主な調査・研究は、以下のとおりです。

1. 入学者選抜方法等に関する調査・研究
2. 入学試験データの分析・評価
3. 受験生向け広報活動の企画立案と推進

アドミッションセンターの組織

センター長(教育担当)、副センター長(学長補佐・入試統計担当)、専任教員(1名)、兼務教員(学長補佐・入試広報担当)、特任教員(1名)、担当事務(課長代理と事務補佐員の2名)で構成されています。

(2018(平成30)年3月現在)



アドミッションセンター

自己推薦型入試の導入

◆ 自己推薦型入試 <2020(平成 32)年度入試導入>

(1) 導入の目的

鹿児島大学では、「学びたい力」(鹿児島大学への入学を強く希望する者)、および「学ぶ力」(大学の授業を受講できるレディネス*)を持った人材を求めていることから、新たな多面的総合的評価入試である「自己推薦型入試」を新設する。

鹿児島大学では現在、教育改革を推進しており、中でも入試改革は、学位の質保証のために必要な教育改革の一環と位置づけている。「自己推薦型入試」の新設により、入試を起点として、目標達成型・体系の一貫教育における初年次教育への円滑な接続を目指す。

(*レディネスとは、学問の修得や学修には、一定レベルの知識・経験、心身の成熟などの素地が必要であり、これらの条件のことをいう)

「学びたい力」(鹿児島大学への入学を強く希望する者)については、現役生や既卒生を対象とし、また、推薦入試に見られるような一高校からの人数制限枠等を設けず、鹿児島大学を第一志望とする受験生が、自らの意思で自由に出願できることとする。

「学ぶ力」(大学の授業を受講できるレディネス)については、個別試験として講義型試験を実施する。講義型試験では、①講義を主体的に聴いて要点を「キャッチ(思考・判断・理解)」し、②キャッチした要点を「メモ」し、③出題された設問等に文章で的確に表現する能力を評価する。

新設する自己推薦型入試は、学力の3要素の中で、思考力、判断力、表現力、主体性を特に重視する入試である(一般入試(前期日程)ではこれまで主に知識・技能、思考力を、一般入試(後期日程)では主に思考力、意欲・関心、適性を重視している)。

講義型試験では、大学入学後の授業(初年次教育)の導入段階での「学ぶ力」の形成力を確認することが目的であることから、必ずしも高等学校における各教科・科目の高度な専門知識を前提とせずとも、講義内容を理解できるように配慮する。講義型試験は、志願する学部・学科等に関わらず同一の内容とする。

(2) 導入する学部・学科等

以下の8学部で導入することが現時点で決定している。

法文学部人文学科(全コース)、理学部(全学科)、医学部保健学科看護学専攻、歯学部歯学科、工学部(注)、農学部(全学科・全コース)、水産学部(国際食料資源学特別コース)、共同獣医学部獣医学科

(注)工学部で導入する学科については、決定次第、公表する。

(3) 選抜方法

大学入試センター試験の成績、講義型試験(2月上旬実施予定)、および出願書類・面接試験等の結果を総合して合格者を決定する。大学入試センター試験は、5教科7科目をベースとするが詳細は決定次第公表する。

講義型試験では、まず、高等学校の1コマの平均的な時間の範囲内で講義を聴講する。その間、講義内容をメモするなどして理解を深める。その後、講義内容に関連した設問に解答する形式とする。

※「各募集単位の募集人員」「大学入試センター試験利用教科・科目数」「個別試験利用科目等(面接の実施の有無等)」等については決定次第公表する。

アドミッションセンター

多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウム
—高大双方の教育の取り組み事例から—

(1) 開催趣旨

鹿児島大学アドミッションセンターでは中教審で示された学力の3要素を持つ多様な人材を受け入れるため、入試改革の議論を進めている。その際、必要となるのが地域の高等学校と共通認識を持つことであると考え、本シンポジウムを企画し開催した。

本シンポジウムでは、多面的・総合的な観点での入試の実施や、そうした能力の育成を目指す特色ある取り組みについて、大学、高等学校の先生方より情報提供をいただき、参加者全体で多面的・総合的能力の育成と入試について意見交換を行った。

(2) 開催概要（事前告知として関係者に配布した案内リーフレットを掲載）

第2回
多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウム
—高大双方の教育の取り組み事例から—

入場無料

日時 平成29年6月10日(土)
13:30~16:10(開場13:00)

会場 鹿児島大学 郡元キャンパス 稲盛会館

定員 150名
* 定員になり次第、申し込み締め切らせていただきます。
* 定員に満たない場合は、当日参加も可能です。
* 駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。



【車をご利用の場合】
「工学部前」電停下車 徒歩1分

【バスをご利用の場合】
市 営：⑤武岡・鴨池港
⑥鴨池・冷水
⑦鴨池
鹿大付属
⑧鶴ヶ丘・鴨池港
鹿児島交通：⑨紫原・桜ヶ丘五丁目
「法文学部前」バス停下車 徒歩7分

プログラム

開会の挨拶	13:35~13:45
清原 貞夫 先生 (鹿児島大学 教育担当理事・副学長・アドミッションセンター長)	
大学からの情報発信①	13:45~14:15
「筑波大学での取り組み」 島田 康行 先生 (筑波大学 アドミッションセンター長)	
休憩	14:15~14:30
大学からの情報発信②	14:30~15:00
「九州大学での取り組み」 木村 拓也 先生 (九州大学 人間環境学研究院(教育学部))	
高校からの情報発信	15:00~15:30
「鹿児島中央高等学校での取り組み」 上赤 洋平 先生 (鹿児島県立鹿児島中央高等学校)	
質疑応答・総括討議	15:30~16:10
閉会の挨拶	16:10
新森 修一 先生 (鹿児島大学 アドミッションセンター副センター長・理工学部研究科理学系教授)	
❖ 総合司会 ❖ 竹内 正興 (鹿児島大学 アドミッションセンター准教授)	



(3) 結果報告

シンポジウムは、多面的・総合的能力の育成や入試に関する大学・高等学校のさまざまな取り組みに特に焦点を当てて行われた。

まず、鹿児島大学の教育担当理事・副学長・アドミッションセンター長の清原先生より、開会の挨拶として、鹿児島大学が教育改革に取り組む背景について改めて説明が行われた後、「総合教育機構」の設立をはじめとした、進行中の改革の動向について紹介が行われた。

次に筑波大学の島田先生より、共通テストの国語の記述式問題の位置付けやあり方についての説明と、筑波大学における特色ある入試の取り組みや改革の進捗状況の紹介が行われた。

その後、九州大学の木村先生より、九州大学の特長的な取り組みとして、21世紀プログラム課程の紹介とその選抜方法、中でも特に「講義型試験」について情報提供が行われた。

最後に、鹿児島中央高等学校の上赤先生より、鹿児島中央高校においてSSH指定校の認定を目指すこととなった背景や、その取り組みの過程について報告が行われた。

講演後の質疑応答・総括討論では、多面的・総合的な能力の育成や、そうした能力を測る入試の導入へ向かっていく中での対応についての質問が参加者から相次ぎ、その関心の大きさが改めて明らかになった。また、閉会後も、講師の先生方と参加者との間で個別に意見交換が行われ、シンポジウムは大盛況の中で終了した。

(3人の先生方の講演内容と配布資料については、次ページ以降に掲載。)

(4) 事後アンケート結果

シンポジウムの参加者93名のうち、64名(68.8%)から回答をいただいた。

◆ シンポジウム全体を通しての満足度について

5段階評価(5:とても満足、4:まあ満足、3:どちらともいえない、2:やや不満足、1:不満足)で平均4.45と満足度が高い結果となった。

◆ シンポジウムで特に印象に残った点について

- ・ アクティブな学生を育てる事、評価する事の意義を感じました。今後の我が国で求められる学生像もこのようになっていくのかと感じます。
- ・ 高大接続や新テストについて、多くの情報を見聞きしていますが、大学の中でどのように今回の変革を捉えて、工夫されているのかがよくわかりました。
- ・ 入試そのものの実施にも多くの労力が必要かと思いますが、入学後に他の学生への効果も期待できるところかと思えます。

◆ 今後、高大接続領域において鹿児島大学へ期待すること等の意見について

- ・ 様々な大学、そして高校の取り組み、考え方を伺うことができ、内容がおもしろく、あっという間の時間でした。大変参考になりました。また催してほしいです。
- ・ いかなる入試のあり方が鹿児島という状況に適しているのかをいろいろと検討して、独自性を打ち出してほしい。
- ・ 高校と大学で基礎学力・意欲・探究する力を「一緒に育てる」という意識が必要だと考えた。
- ・ プラットホームの企画が実際どういう成果が出るか、期待しています。プラットホームの実績報告があれば、貴学の工夫がより高校に分かりやすいと考えます。

講師の先生方、ご参加いただきました皆様方、ありがとうございました。アドミッションセンターでは、引き続きシンポジウムの開催等を通じて、地域の高校をはじめ、教育関係者の皆様方との連携を重視していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

アドミッションセンター

大学からの情報発信① 筑波大学での取り組み

筑波大学 アドミッションセンター長 島田 康行 先生

筑波大学の島田と申します。本日は「国語の記述式問題の位置付けと活用のあり方」についてご説明をした後に、筑波大学の取り組みについてご紹介しようと思います。よろしく願いいたします。

それでは初めに、新しい共通テストにおける国語の記述式問題について、これまでに発表された文章・報告等から位置付けを行っていきたいと思います。2016年3月の「高大接続システム改革会議」最終報告の中で、今後の社会では、「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程や結果を表現する能力」が特に重要となるため、共通テストにおいてマークシート問題を一層改善するとともに、記述式問題を導入していくのだということが言われましたが、これが大本にあったのかなと思います。記述式問題の導入が象徴的に言われますが、新しい共通テストでは、マーク式問題の改善も併せて図られていることがここから分かります。

次に記述式問題を導入する具体的なメリットについては、「より主体的な思考力・判断力の発揮が期待できる」こと、「思考のプロセスがより自覚的なものとなる」こと、あるいは、もちろん記述式ですから「表現力の発揮が期待できる」ことが挙げられます。さらに、もう一つは、記述式を導入することによって、高等学校において「言語活動等の充実が促され、生徒の能動的な学習をより重視した授業への改善が進むことが期待できる」ということが挙げられ、いわばウオッシュバック効果のような効果が期待されています。

これについては、2016年8月に出された「高大接続の進捗状況について」という報告でも、同様に言われていました。さらに、「記述式試験で評価すべき能力に関する高校・大学間での共通理解を深めることができる」とあるように、共通テストの中で記述式問題を実施することで、共通理解が進むのではないかということが意義として言われていました。

これに関して、文科省が明らかにした「国立大学の二次試験における国語、小論文、総合問題に関する募集人員の概算」というデータによると、国立大学の二次試験において、国語、小論文、総合問題のいずれも課さない学部の募集人員は全体の61.6%に上ります。この数字は、数え方によって随分変わってきます。ほかの学科試験の中でも記述式は導入されているのでこんなに少なくはないという指摘ももちろんあります。では、母語としての日本語の運用能力を中心として測る国語の記述式問題の場合、個別試験で課しているのは本学では前期定員の11.2%に過ぎません。選択科目として課しているところまで含めても21.2%です。実際にはこんなに多くの学生は選択しませんので、本学入学生の場合、二次試験で国語の試験を通過してくるのは十数%となります。

その結果と言えるのかもしれませんが、次のようなことが起こっています。現在、約96%、ほぼ全ての大学で1年生に対する初年次教育が行われています。その中で実際に行われているものとして一番多いのは、「レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラム」で86.2%です。しかし、実際にはレポートの書き方のような作法を教えて済む問題ではありません。論ずるとは何か、論証するとはどのようなプロセスなのかといった基本的なところから指導

するのが、このことの実際の中身になっている大学が、恐らく全国でも多いのではないかと思います。

一方で、実はこれらのことは、本来であれば、高校までに学んできてほしいことでもあるわけです。高校の必須履修科目「国語総合」の学習指導要領は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」という大きな三つの領域からなっています。その各領域の中に指導事項が並んでいます。しかし、印象として申し上げれば、「書くこと」あるいは「話すこと」、「聞くこと」の指導というのは、現状の高等学校の授業の中では、どちらかというと低調だと思います。このような状況がある中で、記述式問題を導入していこうという流れになっています。

高大接続システム改革会議の最終報告では、「解答の自由度の高い記述式ではなく」、「『条件付記述式』を中心に作問を行う」こと、そして「平成36年度以降の次期学習指導要領の下ではより文字数の多い記述式の問題を導入する」こと、さらに記述式問題の結果については「段階別表示」とすることが言われていました。

さて、それでは国語の記述式問題の場合、どういう枠組みで作問が行われていくかについてです。先述した「高大接続改革の進捗状況について」の中の、国語における「評価すべき能力と問題の形式」で挙げられているもののうち、「①テキストの部分的な内容を把握・理解して解答する」、あるいは「②テキストの全体的な精査・解釈によって解答する」という辺りの問題は現行のセンター試験でも測っているところですが、しかしその次の「③テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題」という部分までは現行のセンター試験ではもちろん測られていません。さらに、各国立大学の記述式の問題を調べてもここまでやっているのは散見される程度です。従って、共通テストの国語の記述式問題では②と③の内容を問うていくことが想定されています。一方、「④テキストの全体的な精査・解釈を踏まえ、自分の考えと統合・構造化して解答する問題」は相当自由度が高くなりますので、これは各大学の個別試験・小論文等の中で問われる部分になります。

では、②と③の内容について、それをどのような出題の形式で、具体的にどう解答させるかについて見ていきましょう。

「②テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題」では、「テキストにおける筆者の主張と理由・根拠を説明する」、「テキストに表現された事物について、目的・場面・文脈・状況等を説明する」、「テキストの会話や表現等に注目して、登場人物の心情の変化等を説明する」、「テキストを通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点について説明する」、「目的に応じてテキスト全体を要約し、論旨に沿って説明する」といったことが具体的な問題として表現されています。また、「③テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・捜査して解答する問題」では、「テキスト全体の論旨を把握し」、「推論による内容の補足をして、筆者の主張について論じる」、「既有知識や経験による内容の精緻化を行って論じる」、「目的に応じて必要な知識を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる」ということのほか、「複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる」といったことが挙げられています。そして、今回の記述式の問題の中では特に③のほうに重点を当てて出題をしていこうとなったわけです。

先月発表された『『大学入学共通テスト（仮称）』実施方針（案）』の中でも、やはり一貫して「複数の情報を統合し構造化して」、「根拠に基づいて論述したりする」力を評価するのだということ、

また、特に「論理の吟味・構築」や、「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視するのだということを言われていたわけです。

そのほか「出題・採点方法」について、作問、出題、採点はセンターにおいて行うことや、採点に関しては民間事業者を有効に活用することも言われていました。また、出題素材選定として「契約書や法令の条文、公文書等」のようなものも使われるということで、モデル問題が公開されました。「これが国語の問題か!？」とびっくりした方も随分多かったようですが、実用的な文章を教材として取り扱うことは従前より学習指導要領で定められています。教科書には牛乳の成分表や薬の効能書きが教材として載っています。しかし、本来、なぜ実用的な文章が教科書に載っているのかという点が重要ではないでしょうか。

今後、何回かのプレテスト等を通じて、結果表示のあり方や条件付作文の条件が整理されていくことになります。先生方のご関心の高いところかと思しますので、一緒に見守っていただければと思います。

それでは続きまして、筑波大学の入試改革の取り組みについてお話いたします。

筑波大学には学部・学科はありません。「学類」あるいは「専門学群」という教育組織、募集単位があります。学類・専門学群ごとに全体の定員が決まっており、実施する入試の種類や募集人員も学類・専門学群ごとに決まっています。また、現在、筑波大学では、全部含めて14種類の入試を実施しています。一昨年からは国際バカロレア特別入試も始めました。

従来から、地歴公民の個別学力検査等では「○○について、400字以内で解答しなさい」という問題を4問、ずっと出し続けていました。それから、そのほか理科等の中でも、比較的量のある記述式の問題を出していました。思考力・判断力・表現力はこれまでも測っていたと考えられますが、今後の改革の中で一層そういったことへの説明がつくように、重点的に記述の問題も改革を行っていかうとしています。

それから推薦入試についてです。筑波大学は1970年代に創設されましたが、実は、創設当初からずっと推薦入試をやっています。全入学定員の25%を推薦入試で取っています。選抜の方法としては、小論文あるいは実技に加えて面接という形です。この推薦入試の現在の平均倍率が2.6倍ぐらいです。出願にあたっては、「学習成績概評がA段階に属すること」という要件を設けています。「高校成績が良好である」ということはいったい何を意味するのかということ考えた結果、それは「学習習慣」がしっかり身につけており、「自己管理能力」が高く、「協調性」があり、「規範意識」が高いこととわれわれは評価することにしました。どんな学校でも、A段階の子にはこのような傾向が見られるのではないかと思います。

さらに、国立大学では先駆けとして、九州大学や東北大学とともに、2000年からアドミッションセンター入試（AC入試）という自己推薦型の入試を始めました。現在、全入学定員の4%をAC入試で選抜しています。この入試では「課題発見・解決能力」を重視します。「主体的に学ぶ力」を「学力」と見なし、これを重視するというので、推薦入試とは異なる評価基準で選抜をしています。成績概評の要件はなく、既卒者、社会人であっても受けられる入試です。AC入試では、9月上旬に出願があり、まず、第一次選考は書類選考を行います。志願理由書と自己推薦書を出してもらいますが、一番大事なのが自己推薦書でして、これは形式も分量も自由です。本人の課題発見・解決能力が分かるように、志願者の主体的、継続的な研究活動の中で、どういう課題の発見と解決があったのかということを書類にまとめて出していただきます。第二次選考

は個別の面接になりますが、書類選考を経て、「この書類のとおりであればこの方は合格にしよう」という方を面接に呼んでいます。ですので、面接を受ける受験者数は定員の1倍台程度にぐっと絞り込んでいます。この個別の面接では、自己推薦書についてやりとりをすることにしていきます。やり取りを通して、本当に受験生本人がその自己推薦書を作るだけの能力を有しているのかということを確認しています。ということで、「主体的、継続的な」という辺りが一つのポイントです。研究活動の到達度を測るのではなく、そこに至るプロセスを重視するという形で、活動の質を評価しているということになります。

さて、AC入試で入学した学生の入学後の様子についてですが、GPAで見ると、成績は良かったり悪かったりです。しかし、本学で国際・国内レベルの審査、または学会等で高い評価を得た者を対象として行っている「学生表彰」をどれくらい受けているかという指標で見ると、2005年から2010年までの5年間で71人が学生表彰を受け、そのうち23件がAC入試の学生でした。全学生定員の4%であるAC入試の入学者が学生表彰中では32%を占めているということであり、さらに、本学には「先導的研究者体験プログラム」というものがあります。これは学部1年生から3年生を対象としており、「自分はこういう研究がしたい」という意思があって、それを申請し、審査によって認められれば、大学1年生でも学内に研究用のスペースと予算がもらえるというプログラムです。これについては2009年～2012年までの間に115件が採択されていますが、そのうちAC入試の合格者が42件でした。また、AC入試入学者のうち約10%はこのプログラムに応募して、参加しています。

AC入試も始めて16年になりました。入学者も1,000名をようやく超えたところですが、比較的、目的意識をはっきりと持って来る者が多いので活躍する者も少なくありません。

それ以外にも、本学ではグローバル化に向けた入試改革としてさまざまな取り組みを行っています。

まず、平成32年度より一般入試を「大括り」化します。大括り化して、一つの受け入れ先に学生を受け入れます。受け入れ先は「スペシャリティ・ファインディング・ターム」とか「SFターム」と呼びます。ここへは三つの入試区分から学生を受け入れます。文系の方が受けやすいような入試区分、理系の方が受けやすいような入試区分、どちらの方でも受けられる入試区分という三つを検討しています。そこから2年生に進級するときに各学位プログラムに配属されていきますが、どの入試区分で入っても、自由に進むプログラムを選ぶことができるという仕組みです。もちろん、希望する学位プログラムごとに、SFタームの間に履修すべき科目や、その成績に関する要件はあります。以上のような大括り入試の実施に向けて、「どういう区分にしたらいいたろうか」とか、「SFタームをどう設計したらいいだろうか」ということをあれこれと考えているところです。

それから、既に発表していますが、特別入試枠は現行の30%からだんだん拡大していく方針です。あまりもう時間はありませんが、本年度中に大枠を決定して公表する予定です。

以上のことについて、まだまだ暗中模索、手探りで進めているところです。ご清聴ありがとうございました。

全国大学入学希望者選抜研究連絡協議会大会(第12回)
 「新しい大学共通テストの動向」
 2017.05.26 @富山国際会議場

**記述式問題の位置づけと
活用の方について**

筑波大学 島田康行

導入に向けて - 作問、教科、結果表示

▶ 高大接続システム改革会議 「最終報告」(p.56-57)

Ⅲ3(3)ウ
(作問と結果表示)

- ・ 「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の記述式問題については、…解答の自由度の高い記述式ではなく、設問で一定の条件を設定し、それを踏まえて結論や結論に至るプロセス等を解答させる「条件付記述式」を中心に作問を行う…
- ・ 対象教科については、当面、高等学校で共通必修科目が設定されている「国語」「数学」とし、特に記述式導入の意義が大きいと考えられる「国語」を優先させる。平成32年度から平成35年度までの現行学習指導要領の下では短文記述式の問題を導入、平成36年度以降の次期学習指導要領の下ではより文字数の多い記述式の問題を導入する。
- ・ 結果の表示については、記述式問題の持つ特性を踏まえ、段階別表示とする。(脚注：段階別表示について、個々の問題に関して表示するのか、総合的に表示するのかなどについても検討する。)

導入の意義 (1)

▶ 高大接続システム改革会議 「最終報告」(p.52)

Ⅲ3(3)イ
③今後の社会で特に重要となる能力の育成・評価

- …複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程や結果を表現する能力は、今後、社会のどのような分野においても主体性を持って活動し、活躍するために特に重要となるものであり、こうした能力を高等学校教育や大学教育でよりよく育成していくことが重大な課題…
- そのためには…「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」において、複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力やその過程や結果を表現する力などを評価することができるよう、マークシート式問題の一層の改善を図るとともに、自ら文章を書いたり図やグラフ等を描いたり式を立てたりすることを求める記述式問題を導入するための具体的方策…

作問の枠組み - 「国語」の場合 (2)

○ …国語の問題として解答させる内容としては、以下の4種類に大別

- ① テキストの部分的な内容を把握・理解して解答する問題
- ② テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題
- ③ テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題
- ④ テキストの全体的な精査・解釈を踏まえ、自分の考えと統合・構造化して解答する問題

○ 共通テストの国語の記述式においては、「②テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題」だけでなく、「③テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題」を条件付記述式として出題することを想定している。

導入の意義 (2)

▶ 高大接続システム改革会議 「最終報告」(p.56)

Ⅲ3(3)ウ
③記述式問題の導入

脚注83 記述式を導入する具体的なメリット

- ・ …より主体的な思考力・判断力の発揮が期待できる。
- ・ …思考のプロセスがより自覚的なものとなることにより、より論理的な思考力・表現力の発揮が期待できる。
- ・ 記述により自らまとめた新しい考えを表現させることにより、思考力や表現力の発揮が期待できる…

○ …記述式を導入することにより、高等学校教育においても、習得・活用・探究の学習過程における言語活動等の充実が促され、生徒の能動的な学習をより重視した授業への改善が進むことが期待できる。

作問の枠組み - 「国語」の場合 (4)

② テキストの全体的な精査・解釈によって解答

- * テキストにおける筆者の主張とその主張の理由・根拠を説明する
- * テキストに表現された事物について、目的・場面・文脈・状況等を説明する
- * テキストの会話や表現等に着目して、登場人物の心情の変化等を説明する
- * テキストを通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点について説明する
- * 目的に応じてテキスト全体を要約し、論旨に沿って説明する

③ テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答

- * テキスト全体の論旨を把握し、推論による内容の補足をし、筆者の主張について論じる
- * テキスト全体の論旨を把握し、既有知識や経験による内容の精緻化を行って論じる
- * テキスト全体の論旨を把握し、目的に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる
- * 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる

導入の意義 (3)

▶ 「高大接続改革の進捗状況について」(2016.08.31)

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の検討状況について
記述式問題の導入

(1) 記述式の導入意義

- 記述式では、…「文章の解釈」だけでなく、テキストの内容を基に考えを文章化する「文章による表現」のプロセスを評価できる。
- 入学選抜において、考えを形成し表現する能力などをより的確に評価することができる。このことで、高等学校における能動的な学習を促進する。
- 共通テストの中で記述式問題を実施することで、記述式試験で評価すべき能力に関する高校・大学間での共通理解を深めることができる…

作問の枠組み - 「国語」の場合 (6)

▶ 「大学入学共通テスト(仮称)実施方針(案)

評価すべき能力・問題類型等

多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめたり、その過程や結果について、相手が正確に理解できるように根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を評価する。

設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式とし、特に「論理(情報と情報の関係性)の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視する。

あらためまして…

筑波大学入試改革の軌跡

筑波大学人文社会系／AC 島田康行

AC入試

- ▶ 9月上旬出願
- ▶ 課題発見・解決能力を評価
 - 主体的、継続的な活動における課題の発見と、その解決のプロセスから「学ぶ力」を評価
- ▶ 第1次選考(書類選考)
 - * 調査書(要件なし)
 - * 志願理由書(800字)
 - * 自己推薦書(形式・分量自由)
- ▶ 第2次選考(個別面接、約30分)
 - * 定員の2倍以内程度
 - * 提出された書類についての討議

推薦入試

- ▶ 創立当初からの先進的な取り組み
- ▶ すべての学類・専門学群で実施
- ▶ いわゆる「公募制」

創設にあたっての新しい構想の一つ

- ▶ 「画一的な選抜方法をとるのではなく、たとえば入学定員の一部については、高等学校在学期間の成績が非常に優秀なものの中から、学力検査によることなく、出身学校長から提出される調査書、推せん書に基づき入学させる方法、あるいは専門学群にあっては、その専門分野に関する実技を重視するなどの多様な方法を積極的に取り入れるべきである」(筑波新大学創設準備調査会「筑波新大学のあり方について 一報告一」昭和46年7月)

AC入試

- ▶ 自己推薦の内容
 - * 継続的・主体的な活動・研究を基に
 - * グループ研究の場合は、本人の貢献を明確に
 - * 学類ごとに異なるアドミッションポリシー「研究を…」⇔ 社会的活動
 - * 合格者の例をweb公開(平成18年度分から)
<http://ac.tsukuba.ac.jp/examination/ac/report>

⇨ 「為にする研究」はNG

推薦入試

- ▶ 平成29年度倍率:平均2.6倍 (最低1.2倍、最高5.5倍)
- ▶ 「高校成績が良好」であることは何を意味するか
 - ⇨ 学習習慣、自己管理能力、協調性、規範意識…
 - ⇒ 入学後も維持される?
 - ≠ 研究意欲旺盛
- ▶ 「チャンスが増える」のか
 - ⇨ 評価基準は試験ごとに異なる
 - ⇨ 個別学力検査等に向けて日程的な「リスク」

筑波大学 グローバル化に向けた入試改革について

全学版アドミッション・ポリシー

「筑波大学は、自立的に世界的に活躍できる人材を育成するため、本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む人材を受け入れます。」

- 学生の自立的な探究心に基づき入学希望者選抜
 - 入学準備プログラム(国際)、基礎強化プログラム(教養)の導入
 - 先進的研究者体験プログラム(AIR)の全学的導入
- 入学試験の国際化対応(英語検定試験の導入を含む)
 - 国際バカロレア特別入試を含むグローバル入試を全学で実施
 - (国際バカロレア特別入試)平成27年度から入試科目を英語と数学に変更し、平成28年度から英語と数学の2科目を英語と数学に変更
 - 4技能(RJ, WS)全国ACETEC-CBT等の英語検定試験の導入
- 現行入試制度の見直し
 - 推薦入試定員比率の段階的引上げ(40~50%まで)及び新たな推薦導入(附属高校、既卒者、編入学者推薦及び大学教員推薦(教員))
 - 学群単位での入試等「人取り化」
 - 高大連携プログラム構築(入学後の教育体制のシナジー)
- 業務体制の構築
 - 入学教育高度化センター(教養)の設置
 - 入試実務体制の整備等(アドミッションセンター連携強化等)

グローバル入試

国際バカロレア特別入試
短大生後特別入試(入学時期は選考制)
グローバル加算課外英語コース特別入試
私設外国人留学生入試
スーパーグローバルハイスクール指定校入試

推薦人員: 各教養課程で異なる
推薦単位: 全学
選考方法: 面接及び書類選考
アドミッションセンター一元的

学生啓発・オールラウンド型学修プログラム
各種グローバル関連単位プログラム(大学誌を含む)

IMAGINE THE FUTURE.

AC入試 (アドミッションセンター入試)

- ▶ 国立大学では先駆けとして(2000年、東北、筑波、九州)
- ▶ 一部の学類・専門学群で実施
- ▶ 全入学定員の約4%
- ▶ 自己推薦型
- ▶ 課題発見・解決能力の重視
- ▶ 高校成績、卒業見込みなどの要件なし

学力=「主体的に学ぶ力」
推薦入試とは異なる評価基準

進行中の入試改革

- ▶ 「学力の3要素」を多面的に評価する方法を模索中
 - 教科テストの見直し
 - 面接・書類選考の導入範囲の拡大

▶ 平成32年度より一般入試を「大括り」化
3つの入試区分を設定(設定区分は検討中)
2年進級時に所属を決定
入試区分と所属は結びつけない

- ▶ 特別入試枠の拡大(現行30%からさらに増加)
- ▶ 平成29年度中に大枠を決定・公表に向けて準備

アドミッションセンター

大学からの情報発信②
九州大学での取り組み

九州大学 人間環境学研究院 (教育学部) 木村 拓也 先生

九州大学の木村と申します。どうぞよろしくお願ひします。本日は、九州大学21世紀プログラムの17年間の経験をお話ししたいと思います。公表されている募集要項等では分からないところまで、少し踏み込んで、どういう入試で、どういう学生が入ってきたのかということをお話ししたいと思います。

そもそも、実は21世紀プログラムは、もう募集を停止しています。ご存じのとおり、九州大学は平成30年度から「共創学部」という新しい学部を新設します。21世紀プログラムはそちらに吸収されますので、今後募集は行われません。これまで21世紀プログラムは、学部には所属せず、卒業論文の指導教官を自由に選べる仕組みとしてやってきました。本学の定員は2,555人ですが、そのうち26人しか21世紀プログラムでは入学しません。わずか1%です。しかし、その彼らがものすごく学内の中で存在感を示してきた17年であったと総括ができると思います。

まず、21世紀プログラムの選抜方法ですが、センター試験を使わない入試をやってきました。東北大学・九州大学・筑波大学にアドミッションセンターができ、AO入試が始まった当時から、九州大学ではこの入試に取り組んでいます。その途中で、さまざまな試行錯誤を重ねてきました。最初の頃は、受験生を図書館に送り込み、その中で自由に好きな本を見つけて小論文を書いてもらうという形の試験を行っていました。その後、一次選抜の書類審査を経て、二次選抜では1日目に講義・レポートを3テーマ課し、2日目にグループ討論・小論文・個人面接を行い、11月下旬に合格発表という形に変わりました。

それでは、講義型試験を実施する狙いについてまとめていきます。この試験では、まず先生方の講義を大学と同じように聞きます。その後、レポートを書き、それに基づくディスカッションを行い、最後に自説をまとめる小論文を書きます。これら全てが大学での学習そのものです。この講義型入試は、大学の学習生活そのものをぎゅっと詰め込んだ入試として、大学入学後に授業でばんばん発言して、活躍してくれるような学生を選ぶために行われていました。ディスカッションはものすごく盛り上がります。教員が止めないと、もうしゃべりまくって会話が聞き取れないぐらい議論を活発に行います。そこで評価された学生は、入学してもやはりよく話す学生、よく議論ができる学生です。また、試験で課す三つのレポートと小論文はかなり長時間にわたって書かせます。すると、やはりよく書ける学生がこの試験を経て入ってきます。一般入試よりも、よりアクティブで目的意識を持った学生が入学する入試区分として、この講義型試験を私たちは非常に評価しています。

次に、21世紀プログラムの志願者・合格者の推移についてです。志願倍率は初年度から一時期下がっていましたが、毎年、募集人員のおよそ4~5倍、人数にして大体120人ほどの方に受験していただいていた。また、男女の割合を比較すると、合格者は女性が圧倒的に多く、男性が少ないということが分かります。さらに、合格者の出身地別に見てみると、21世紀プログラムは東京から来る学生も多いですが、九州を中心に受験生を集めております。東京から来る学生は、少し特殊な高校からよく受験していただいていた。九州に関しましては、県立高校・私立高

校問わずさまざまな高校から受験いただきました。

そして卒業研究ですが、先ほど、どの学部からでも指導教官を選べるとお話ししました通り、医学部も含めた幅広い分野で卒業論文が書かれています。特に教育学部や農学部のような、どちらかというと学際系の強い学部が、よく卒業研究の分野に選ばれていたという印象を持っています。

次のデータが恐らく驚異的なのですが、21世紀プログラムから88.5%の学生が留学をしています。これは延べ数なので、1人で何回も留学している学生もカウントしていますが、21世紀プログラムの学生は、留学をする割合が圧倒的に高いです。2番目に高いのが文学部の34%です。

また、卒業生の進路ですが、大学院進学が37.2%です。実際に、研究者としてはまだ若手ですが、最初の一步を踏み出している方もいます。その他の進路における21世紀プログラムの学生の特徴としては、例えば就職では、募集していない企業に自分で履歴書を送って、就職に結びつけるようなパワフルな学生がいます。そのほか起業する学生もいます。就職先一覧には見えないところではありますが、そういう学生が育っております。

次に九州大学には「山川賞」という賞があります。この賞は学部2年生、3年生を対象に、採択されると卒業まで毎年100万円ずつ、多い学生は卒業までに300万円ほど奨励金が支給されます。この山川賞への応募者数のうち3割が21世紀プログラムの学生です。彼らは定員の1%の人間です。実際に採択者数も3割が21世紀プログラムの学生で、私からするとかなり高い割合ではないかと思えます。

さて、こうした21世紀プログラムの学生を、実際の入試で具体的にどのように選抜しているのかということをお話します。まず一次選抜では、志望理由書・調査書・活動報告書の書類審査のみを行っています。特に重視するのが志望理由書です。複数の学部にわたって自分でカリキュラムを組み立てて学ぶだけの力があるのか、その意気込みがあるのか、そして、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを十分に理解しているのかという点で判断します。評価は4名の者によって、AからDの4段階（活動報告書に関しては3段階）で行っています。

二次選抜は、先述のとおり、ミニ大学生活を体験するような中身で、大学の学習に耐え得るだけの力があるかを判断します。1日目に講義が三つありますが、三つであるのには理由があります。それぞれ人文科学・社会科学・自然科学の分野で、昔、教養部があったときの三本柱となっています。この各分野から一人ずつ先生を立てて50分の講義を行います。それから、その講義に対して期末試験で課すようなレポートをそれぞれ70分で行います。これで1日が終わります。2日目はまずグループ討論を行います。当日の朝に「こういうテーマで議論してください」という論題を渡します。これは1日目の夜に論題の関連情報をインターネットで検索して、予習させないためです。「テーマに合致しない議論をした者はどんどん落としてください」と私たちは言っています。受験する方にもそういう形で説明をしています。グループ討論の150分間は、まず三つの講義テーマから二つを選び、手を挙げて意見を述べる時間を与えられます。残りの時間はフリーディスカッションで、誰がしゃべってもいいという形になっています。グループ討論の場では、さまざまな人がいますが、自分の意見を自分の頭で考えて、はっきりと主張できるかが評価のポイントになっています。その後、一つの論題に関して小論文を行います。また、小論文を作成している間に1人ずつ個人面接を行います。想像できないかもしれませんが、試験会場では飲

み食い自由、さらにしゃべっても構いません。もう他の人の意見をグループ討論で聞いているので、それが正しいかどうか分からないわけです。ですから、静かな試験室ではありません。こうして試験は午後5時に終わります。以上の試験が合計大体13時間かけて行われます。

試験委員は、講義を担当する A 委員と、面接を担当する B 委員がいます。A 委員については、各講義それぞれ、講義を行う人 1 名とレポートを採点する人 2 名の計 3 名でやっていますので、3 講義合わせて 9 名います。面接を担当する B 委員は各部屋 3 名、理系文系織り交ぜて専門分野に分けています。面接室は 5 室ありますので、B 委員は合わせて 15 名います。以上、計 24 名の教員が試験委員として関わっています。裏方の教員も含めると 30 名ぐらいで試験を行っています。26 名を選抜するのに約 30 名の教員が関わっているわけですので、結構コストが高い入試であることに間違いありません。

次に講義内容ですが、人文・社会・自然科学の幅広い分野から選ばれます。前提知識がなくても講義に取り組み、大学と同じように自分でアウトプットをして、レポートを書き、ディスカッションをすることに耐えられるかどうかを試しています。「大学の講義を聞いただけでも受けた甲斐があった」と、毎年この講義が終わったあとには学生からなぜか拍手が起こります。うちの大学で一番講義がうまいといっても過言ではない、ベストティーチャーのような先生を 3 名選んで講義をしてもらいますので、われわれも聞いていて非常に面白い講義です。

一方で、その先生たちに「講義をしてください」と頼むのは私たちの仕事なわけですが、もうそういう先生たちを探すのが非常に大変です。依頼の仕方としては「先生がお持ちの講義のネタの中で、大学生になりたての学生へ最初にする授業をしてください」とお願いをします。最初の授業は、自分の講義に関心を持ってもらうため、やはり興味をひかせる話題や、前提知識のあまり要らない内容のはずです。そうした講義を依頼して、その後のディスカッションのネタも考えていただいて、討論になるような内容をアドミッションセンターの教員とコミュニケーションを取りながら作っていくという作業をしています。ですから、この時に講義担当の先生たちを出題委員として、アドミッションセンターの教員はさながら問題の点検委員のような形で講義型の試験を作っています。

2 日目のグループ討論はテーマごとに討論をしますが、まず、講義に関して挙手制の意見発表を行い、その後時間が余ったら自由討論を行います。これを講義三つ分、3 セット繰り返します。実際の現場では、前に先生が 3 人おり、それをコの字に生徒が囲んで、議論をするという形になっています。

小論文は大きな教室で 270 分ずっと座って書きます。最初の 60 分で書き終える人もいますし、270 分ずっと書いている人もいます。答えはないですから、受験生も悩みながらやっているのが非常に伝わってくる試験会場です。

他にもこの入試で苦勞している点はいくつかありまして、その一つとして、第二次選抜のディスカッションのグループ分けをこだわってやっていることが挙げられます。このグループ分けでは、まず、一次の成績をベースに一番良かった人から順番にグループに並べて行きます。そうして各グループの第一次成績、つまり本学の 21 世紀プログラムのアドミッションポリシーを理解している度合いを均等化するとともに、男女比や現浪比、地域性が均等になるように操作します。同じグループに一つの県や高校の出身者が偏って話しやすい雰囲気をつくられないように、九州外がちゃんといるように操作をしてグループをつくっています。

第一次選抜の順位付けには「多次元マトリックス方式」というものを使います。先ほど、書類審査で提出された志望理由書・調査書・活動歴報告書にA～C(D)で成績を付けるとお話ししました。ここで、一番評価が高いのがAAAの学生です。その次はAAB、あるいはABAという学生です。このように3次元で評価を行うためにキューブの角から順番に番号を振って、その番号を基に受験生に順位点を付けて、その順位点の低い者から合格者を出していくというやり方で評価を行っています。

実は九州大学の多くのAO入試で、こうした方法で評価を行っています。これには理由がありまして、点数で付けてしまうと非常に不都合なことが起こります。評価を点数で付けた場合、点数差を多く付けた先生の意見が効いてしまいます。5点足しても、10点引いても結果は変わりません。それを防ぐためにA・B・C・Dというカテゴリに分けて、点数差のばらつきがないようにやっています。採点基準を作るよりも、採点方法のルールのほうが、こういう総合的な評価をするときには大事ではないかというのが九州大学の17年間の経験です。採点基準は何度やっても完璧なものを作るのは非常に難しいです。個々の教員の観点も違います。それよりも、「どういう得点分布で採点するか」というルールを設けて、それを逸脱しないようにするのが非常に大事なやり方ではないかと思います。そのために、第二次選抜のグループ分けでは、まず各グループの成績を均等にそろえておくという作業が非常に重要になってくるわけです。

次に、採点基準です。先ほど「採点基準はない」というお話をしましたが、ただ、われわれは「ぜひ入学をしてほしい者にAを付けてください」と言っています。先生が見て、学部1年生と比べてきちんと遜色ないかどうかということのみを評価基準にしています。もちろんいろいろな評価基準を細かく立てることは可能ではありますが、われわれが17年間やってたどり着いたのは、もうごちゃごちゃせずにシンプルに評価を行ってもらおうということです。

最後に、講義型の入試の制度設計のコツは、とにかく面白い講義を提供することに尽きるのではないかと思います。「入試自体も大学入試広報なのだ」という気持ちで、「こんなに面白い先生がいるならこの大学で学びたい」と受験生に思わせる入試作りに取り組んでいます。

こうした入試の広報面での効果もあってか、実は21世紀プログラムのAO入試は大学全体としての連続受験が非常に多いです。21世紀プログラムの入試自体は1回しかありませんが、それで落ちてでも前期で入ってくる学生が結構います。

昨今の入試改革によって選抜方法だけが非常に工夫されても、よい志願者がいなければ、よい学生は入学しない、これは当たり前だと思います。ですので、広報が大事だということをつくづく感じている次第でございます。

広報ももちろんですが、もしかするとそれよりも、高校と一緒にどういう生徒を育てていくのか、そのポリシーが大学にとって重要なのではないかと考えています。九州大学では、さまざまな高大連携事業、高大接続事業を行っています。やはり、入試改革だけではなく、高校と大学が手を組んでいろんな学びのあり方を提供することで、つまり、入試と教育が両輪にあることで、成功していくのではないかという実感を持っています。

長くなりましたが、私の話は終わりにさせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

100
九州大学創立100周年
100年の歴史を振り返る

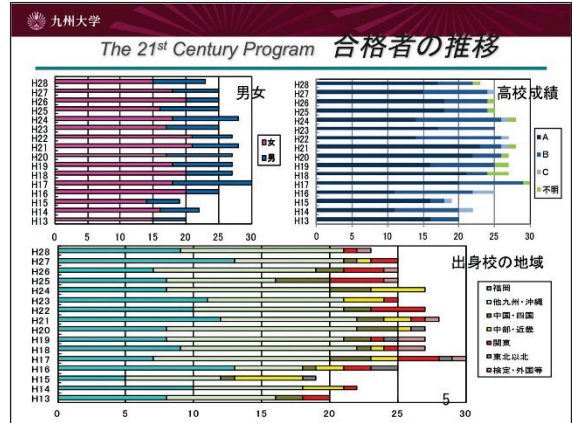
九州大学での取り組み

多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウム
～高大双方の教育の取り組み事例から～

九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授 木村 拓也
大学院 人間環境学府 教育システム専攻 (教育計画・測定評価論)
教育学部 教育社会計画コース

2017年6月10日 @鹿児島大学

九州大学

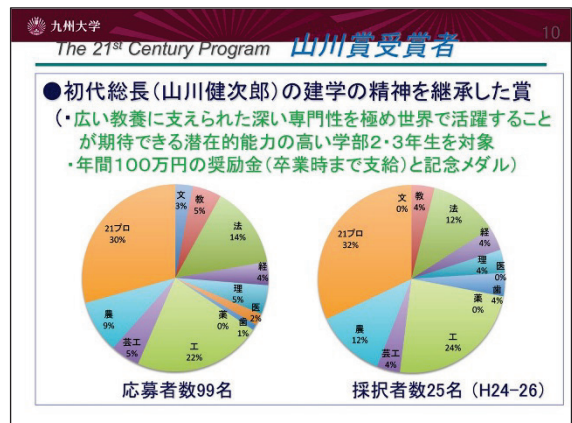
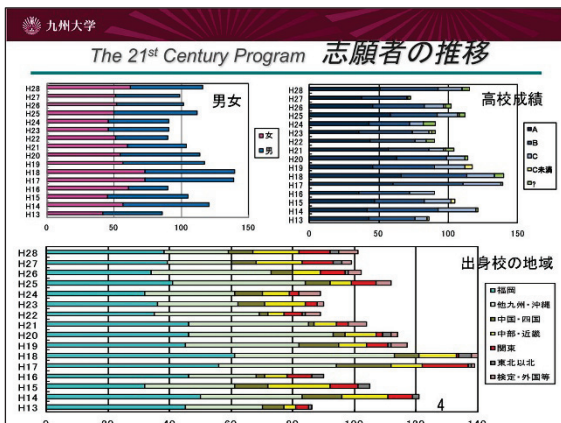
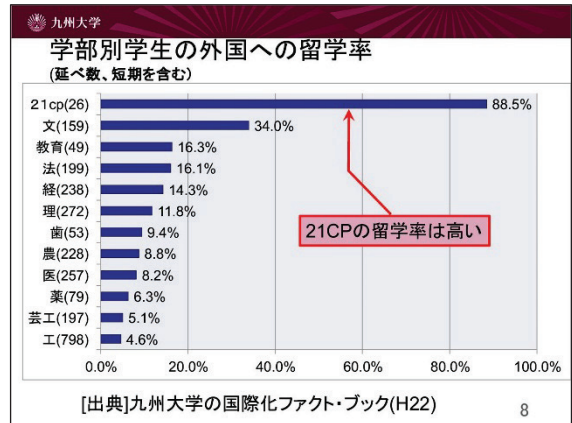
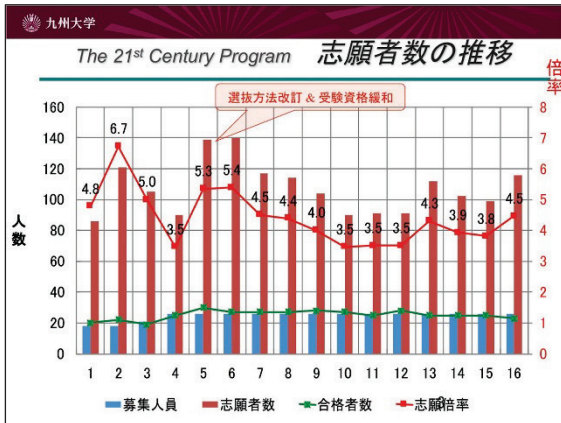
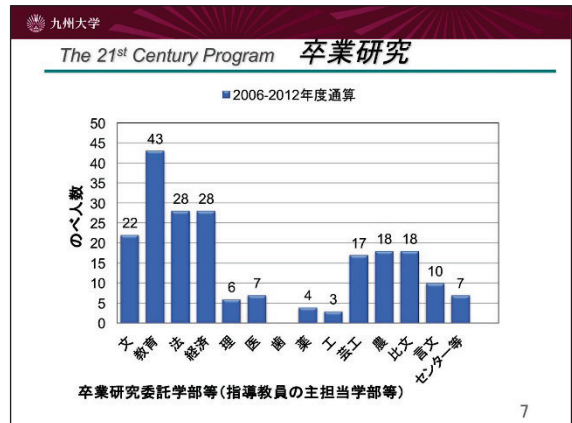


九州大学 2017/2018

The 21st Century Program 選抜の流れ

願書受付	9月下旬	9/15(木)～23(金)
調査書, 志望理由書, 活動歴報告書		
第1次選抜	10月中旬	10/14(金)頃 1次合格発表
第2次選抜	11月上旬	
第1日目	講義・レポート (3テーマ)	11/05(土) @貝塚地区
第2日目	グループ討論, 小論文, 個人面接	11/06(日)
合格発表	11月下旬	11/28(月) 2次合格発表

選抜の過程が入学後の修学の過程



九州大学
21世紀プログラム **第1次選抜**

出願時提出資料

- 志望理由書(2面)
 - 志望する理由、自己の適性や抱負
- 調査書等(内申書): (中学校の取り扱いあり?)
- 活動歴報告書(2面): 中学からの活動を記載可
 - 各種活動、表彰、資格等

第1次選抜: 書類審査

- 「AP」や「求める学生像」との合致度合を評価
- A~Dの4段階(活動歴報告書は3段階)
- 4名で評価
- 順位の高いものから3倍程度に絞る
(16の例では73名。2.81倍)

九州大学
The 21st Century Program **討論, 小論文, 面接**

討論 (150分)
3講義の各テーマごとに討論

全体説明		
講義1	意見発表	自由討論
講義2	意見発表	自由討論
講義3	意見発表	自由討論

受験生は、3つの内2つを選んで意見発表(1回2分以内)をし、その後全員で自由討論する。

小論文 (270分)
いずれか1つの講義を選び、そのテーマで課題を決めて作成

面接 (15分/人)
小論文中に個人面接

- プログラムの趣旨の理解を確認
- 志望理由書、活動歴報告書、講義レポート、討論をベースに質問

こんなにも動き回れる試験なんて...
試験中にお茶が出たって、学校で自慢した...
全体を通じて、先生方が学生のことをとても大切に思ってくれていると感じた...

九州大学
第2次選抜

第1日目(土曜日)

9:30-11:30	講義1・レポート1 (120分)	軸が違う3テーマ 講義: 約50分 レポート: 約70分 講義や資料に英語を含むことがある
12:30-14:30	講義2・レポート2 (120分)	
15:00-17:00	講義3・レポート3 (120分)	

第2日目(日曜日)

論題は当日朝に提示("予習"を避けるため)

9:00-11:30	グループ討論 (150分)	3つの講義から2つを選んで討論
12:30-17:00	小論文 (270分)、個人面接	15分/人

3つの講義のいずれかに関連するテーマを設定して作成
随時別室で休憩可

九州大学
第2次選抜 グループ分け (討論, 面接)

第1次成績

グループ				
あ	い	う	え	お
1 → 2	3	4	5	
10	9	8	7 ← 6	
11 → 12	13	14	15	
20	19	18	17 ← 16	
21 → 22	23	24	25	
30 ← 29	28	27 ← 26		

- 第1次成績を均等化
右表をベースにし、さらに
- 男女比が均等
- 現浪比が均等
- 地域性が均等
- 同一高校別グループ
になるように組換え

九州大学
A委員 B委員 第2次選抜

第1日目(土曜日)

9:30-11:30	講義1・レポート1 (120分)	軸が違う3テーマ 講義: 約50分 レポート: 約70分 講義や資料に英語を含むことがある
12:30-14:30	講義2・レポート2 (120分)	
15:00-17:00	講義3・レポート3 (120分)	

第2日目(日曜日)

論題は当日朝に提示("予習"を避けるため)

9:00-11:30	グループ討論 (150分)	3つの講義から2つを選んで討論
12:30-17:00	小論文 (270分)、個人面接	15分/人

3つの講義のいずれかに関連するテーマを設定して作成
随時別室で休憩可

九州大学
多次元マトリックス方式

第1次選抜の順位付け 3次元の例

1次: 書類審査
4名の委員が各々全受験生を評価

①志望理由書
②調査書等
③活動歴報告書
を3次元で評価

		歴 C			
		動 B			
活 A	A	1	?	?	?
	B	?	?	?	?
	C	?	?	?	?
	D	?	?	?	?
		A	B	C	D
		調査書等			
		志望理由			

九州大学
The 21st Century Program **講義**

年度	テーマ	年度	テーマ
2001	「歴史がもたらした文化の交流」 本邦輸出の日本の原動力を探究 朝鮮や中国による朝鮮半島の歴史	2008	大卒の引退後の生活の実際 右派の政治からLeft, the other side of view 等論議
2002	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2009	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか
2003	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2010	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか
2004	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2011	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか
2005	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2012	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか
2006	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2013	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか
2007	「現代社会の発展と環境問題」 環境問題の解決策を探る 現代社会における責任	2014	「日本の未来」 日本の未来をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか 「日本の未来」をどう描くか

大学での講義を聴いただけでも、受けた甲斐があった...
何の話があるのか興味津々だった...
もらった振り子の重りの5円玉は合格のお守りに...

九州大学
採点基準よりも、採点方法のルールの方が大事

採点基準は何度やっても、完璧なものをつくるのは難しい。
教員個々の観点が違う。また、信頼性は高くない(後述)。

1人の教員が点数差を大きくつけてしまえば、面接や小論文の採点において、1人で可否を決定していることになる。

どういう得点分布で採点するか、というルールの方が大事。

→ただ、面接室が分かれている場合、複数人で小論文を採点する場合は、**相対評価**で採点すると問題が生じる。

アドミッションセンター

高校からの情報発信
鹿児島中央高等学校での取り組み

鹿児島県立鹿児島中央高等学校 上赤 洋平 先生

鹿児島中央高等学校の上赤と申します。本日は鹿児島中央高校の取り組みということで、どういう経緯で中央高校がSSH採択に向けて動くようになったかということをお話しいたします。どうぞよろしくお願ひします。

振り返りますと、先代の校長先生から赴任されて早々に、「新入試に向けてプロジェクトチームを作らないといけない」との提言があり、職員に声を掛けられて「維新プロジェクトチーム」という名前で新入試研究のプロジェクトチームが作られました。メンバーは数学担当の進路主任と理科担当の進路副主任、そして体育担当の先生と国語担当の僕の4名です。この4名で新入試について研究するプロジェクトチームが去年の4月から結成されて、毎週1回の会議を重ねながら進めてまいりました。その会議でいろいろな意見を出し合いましたが、この話し合いは個人的にすごく楽しかったです。中央高校の現状と、これからどうすれば中央高校が伸びていくかということについて、4人で熱く語ってまとめてきました。それを9月の職員会議で提言しました。

提言では、最初に鹿児島中央高校生の現状を示しました。その内容の前に、少し鹿児島中央高校の紹介をします。中央高校は今年で創立55周年ですので、今の1年生は55期生ということになります。現在、1学年に320名の生徒がおりますが、毎年そのうちの170名前後が国公立大学に進学し、ほとんどの生徒がセンター試験を受験する、いわゆる進学校です。鹿児島大学さんにも毎年たくさんの合格者を送り出しており、大変お世話になっています。

中央高校生の現状として、まず、そのよいところは何だろうとプロジェクトチームの4人で話し合ったときに、まじめでコツコツ頑張る子たちであることが挙げられました。ご存じのように中央高校では朝の0限のほか、3年生になると放課後補習、放課後自習を行っており、県内の進学校だところどころ多いと思いますが、生徒は朝の7時35分から夜の7時まで学校で勉強をしています。生徒たちは本当にまじめでコツコツ頑張っております。

しかし、そんな生徒たちにもっと改善してほしいなと思うところもあります。それは、非常に受動的であること、学習意欲が非常に低いこと、乏しい学問観であることです。「〇〇大学に行きたい」とか、「将来何になりたいか」ということを生徒と結構話しますが、その学問でどういふことをするのか分かっていなかったり、「将来〇〇になりたい」という話も、ただ自分が知っている仕事について言っているだけで、本当にそれになりたいのかということが突き詰められていなかったりします。このような課題があるのではないかという話に対して、先ほど紹介した維新プロジェクトチームのメンバーの先生から「中央高校のように0限から夜の7時まで学校で勉強させることが、こういう生徒を作っているのではないか」という興味深い問題提起もありました。これについては本当にいろいろな議論をしました。

職員会議では、こうした鹿児島中央高校生の現状を示した後に、職員向けに、今、求められている「学力の3要素」を示す資料や、「新入試改革のポイント」、「大学入試制度の変化」をまとめたほか、「国公立大学の対応」を示しました。その中で、国公立大学の対応の変化として、各

大学がSSH、SGH校からの入学者をどのようにして獲得するかを模索しているという現状があることを示し、「だからこそ、ぜひ本校でもSSHを導入しよう」ということで、共通理解を求め、職員会議で説明しました。

さらに、「目指す生徒像」として、「自主：自分の意思で行動する生徒」、「好学：好奇心旺盛で、自ら学ぶ意欲に満ち溢れた生徒」、「敬愛：互いに尊重し合う人間関係を形成できる生徒」という3点をプロジェクトチームから提言しました。この「自主」・「好学」・「敬愛」は、「三綱領・五条目」という鹿児島中央高校の校訓のようなものに絡めています。この「自主」・「好学」・「敬愛」という言葉をよく考えてみると、まさに今求められている総合的な学力とかそういうものを表したすごい言葉なのだなどと改めて思います。

具体的な提言としては大きく2点あります。まず「アクティブラーニングと探究活動を教育の柱にしよう」ということで、その合言葉として中央高校のCを使った「Challenge」、「Create」、「Collaborate」という三つの言葉をキーワードにすることを提言しました。ロゴマークも作りました。中央高校の校章のシルエットの中央にCを配置して、三つの矢印の先にそれぞれのキーワードを配置しています。次に、「学校で100%やり切ろう」ということで、「宅習3時間より学校での8時間」を重視することを提言しました。生徒は学校に0限から7限までの8時間います。そのような中で、生徒たちの帰宅後の3時間の宅習よりも、学校にいる8時間でしっかり勉強をさせて、そこで力を付ける方向に転換していくことを提言しました。

今後の課題としては、「授業の中でアクティブラーニングをどう取り入れるか」ということを挙げました。「朝日子」という名の本校の総合的な学習の時間では、今まで、小論文の学習指導を中心に行ってきましたが、そこから探究活動を行う形に変えていってはどうかという提案を行いました。以上が2016年9月に行った提言です。

2016年10月になりますと、今度は「SSH準備委員会」というものを結成しました。「維新プロジェクト」が鹿児島中央高校全体の現状を見て、再び活性化を図ることを目的としていたのに対し、そこからSSH採択のためにもっと具体的な検討を行うために作られたのがSSH準備委員会です。メンバーは、国語・地歴・数学・英語・家庭・体育の担当が各1名と理科担当の2名、計8名で構成されており、この中の理科の先生方が実際に中心になって準備してきました。毎週1回の会議を行いながら、10月、12月、3月の計3回の職員会議でSSHの採択について説明しました。

その中でも、10月の職員会議で説明した内容をいくつかお示しします。まず中央高校の課題として、維新プロジェクトチームでまとめたような課題があることを示して、その課題の解決へ向けた中央高校の変革のきっかけにSSHを利用してはどうかという形で提案を行いました。SSHに指定されると、初年度に1,600万円の資金の援助があり、有名な先生を呼んだり、実験器具をそろえたりすることができます。それを中央高校の変革のきっかけに活かさないかということを説明しました。中央高校がSSH指定校として目指す研究開発テーマは「日本の未来を担い、世界が求める人材の育成 ～21世紀の教育のありかたを提案する～（仮題）」であり、「①課題探求型学習の充実」、「②新学習指導要領の目的に基づいたカリキュラム、スケジュールの開発」、「③主体的・協働的な学びを指導できる指導法の確立」という、この三つを柱としています。

さらに、職員会議ではSSHとはどういうものかについて、資料を用いて説明しました。そこで、職員にSSH導入の有効性というものを説明しましたが、いろいろな考えをお持ちの先生がたく

さんいらっしゃいました。

SSH 準備委員会と維新プロジェクトチームとしては、あくまでも鹿児島中央高校変革のきっかけのために SSH を取り入れようと提案しており、SSH の導入だけではなく、そのほかにも、いろいろな部分の変革を提言しました。例えば、一つは、現在「0 限」という名前で朝補習をやっていますが、その朝補習を廃止、もしくは朝自習という形にすることを提案しました。また、現在、7 時間授業の際は終礼が午後 4 時 40 分ぐらいに終わるので、放課後に教師と生徒が触れ合う時間がなかったり、探求型の活動等を取り入れたときに放課後に取り組む時間がなかったりするため、毎日行っている職員朝礼を廃止するなどして午後 4 時に 7 時間目の授業が終わる形にし、放課後に何とか時間を作ろうということも提案しました。

このような提案に対し、「そもそも 0 限の時間をカットして学力が担保できるのか」という意見や、「学習指導要領が変わったり、大学入試が変わったりすることはよくあるけれども、それに振り回されて学力を担保できないカリキュラムを学校で組んでいいのか」という懸念が寄せられました。それに対して、アクティブラーニングの有効性だとか、SSH を採用するメリットをじっくり説明するべきでしたが、推進委員の先生自身も「探究活動を重視しよう」と言っている反面で、「果たして探究活動を本当に指導できるのか」という不安を抱えている状況がありました。

以上のような形で、鹿児島中央高校では SSH 採択に向けて頑張っていました。残念ながら昨年度は採択していただけませんでした。しかし、2017 年 4 月になりまして、中央高校では、「SSH 準備委員会」から「SSH 推進委員会」へ名前を変えて、また今年度以降も採択に向けて取り組んでいこうとしています。昨年度同様、国語・地歴・数学・英語・家庭・体育の担当が各 1 名と理科担当 2 名の計 8 名のメンバーで、週 1 回の会議を重ねながら、現在取り組んでいるところです。

昨年度、鹿児島中央高校は SSH には採択されなかったのですが、そのほか、いくつか新入試に向けて改革しているところもありますので、ご紹介したいと思います。まず、今年度は総合的な学習の時間を探求的なものに変える取り組みを行っています。具体的に動き始めるのは 7 月ぐらいからになるので、現在、実際に子どもたちが動いているわけではないですが、週 1 時間の総合的な学習の時間をプレ課題研究のような探求型の活動にしていく予定です。また、理科のほうでは今年度から「科学と人間生活」をカリキュラムに加えています。かなり探求の色の強い内容になっています。そうした中で、生徒たちは本当に嬉々として実験に取り組んでおります。この前授業をしていたら、男の子と女の子が 4 人ぐらいで授業中に廊下をとことこと歩いていました。前もって理科の先生から「授業中に生徒たちが移動することがあるかもしれません」という説明はありましたが、その子たちに「今、何しているの？」と聞いたら、「校内を調べている」と言いました。生徒たちはすごくにこにこしながら楽しそうに取り組んでいて、それを見るだけでも、やはり探求というのは基本的に楽しいのだなというような思いを持ちました。また、来月（7 月）からは試験的に職員朝礼をなくすことも考えており、放課後に生徒たちと触れ合ったり、活動したりする時間を増やせないか模索しているところです。

最後に、昨日、「鹿児島県進学指導ステップアップ研究会」の総会が偶然あったのですが、ここでも新入試や総合的な学力の育成がどの学校でも話題になっていました。各校本当にいろいろ悩まれて様々な実践をされているのだということを改めて知ったところでした。

それでは、以上で鹿児島中央高校からの取り組みの報告を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

第2回多面的・総合的能力の育成と 入試を考えるシンポジウム

鹿児島中央高校での取り組み

鹿児島県立鹿児島中央高校
維新プロジェクトチーム・SSH推進委員会
上赤 洋平

新入試改革のポイント

2020年度から実施

思考力・判断力・表現力→問題解決能力が問われる
個別試験の見直し→大学の改革

Admission Policy: どのような学生を求めているか
Curriculum Policy: どのようにして人材育成するか。
Diploma policy: どのような人材を世に出し、社会貢献するか
文科省は入試改革により、高校教育のあり方を改善したい。

Active Learning

2016年

4月
維新プロジェクトチーム結成
数学(進路主任),理科(進路副主任),体育,国語
の4名
毎週1回会議

9月
職員会議にて提言
「新入試に対応するための提言」

大学入試制度の変化

1. 大学入学希望者学力評価テスト（不透明）
2. 個別試験
3. 調査書または高等学校基礎学力テスト
4. 面接・ディベート・集団討論・プレゼンテーション
5. 活動報告書（ボランティア、部活動、各種団体活動）
6. 推薦書（推薦入試のみ）
7. 検定試験・各種大会での顕彰や記録
8. 大学入学希望理由書・学修計画

鹿児島中央高校生の現状

Good! まじめでコツコツ

- 受動的
- 低い学習意欲
- 乏しい学問観

国公立大学の対応

平成33年度までに推薦・AO入試等を入学定員の30%を目標に拡大

- 2016年度
 - 東京大学（推薦入試）、京都大学（特色入試）
- 2017年度
 - お茶の水女子大（AO入試）、大阪大（世界適塾入試）
- 2018年度
 - 一橋大学（推薦入試拡大）、京都大学（特色入試を全学科で実施）

各大学がSSH, SGH校からの入学者をどのようにして獲得するかを模索している

学力の3要素

学びに向かう力
人間性など
どのように社会・世界と関わり、
より良い人生を送るか。

何を知っているか
何ができるか

知っていること・
できることをどう使うか
思案力、判断力、表現力

目指す生徒像

自主
自分の意思で行動する生徒

好学
好奇心旺盛で、自ら学ぶ意欲に満ち溢れた生徒

敬愛
互いに尊重し合う人間関係を形成できる生徒

提言

- Active Learning**と**探求活動**を教育の柱にしよう
Challenge 挑戦しよう。
Create 創造しよう。
Collaborate 共に創り上げよう
- 学校で**100%**！
 宅習3時間より学校での**8時間**。



○ SSHとは

- SSHの目的
 - 国際的な科学技術系人材の育成を図るための科学技術、理数系教育に関する研究開発
 - 理科・数学に重点を置いたカリキュラムの開発
 - 大学との連携による先進的な理数系教育の実施
- SSHで求められるもの
 - 学習指導要領の枠を超え、理数を中心とした教育課程の編成
 - 主体的・協働的な学びを授業に取り入れることによる全校的な授業の改善
 - 研究者の講義、フィールドワークなどによる生徒の興味関心の喚起
 - 海外生徒との交流や、国際学会での発表などを通じた国際的な活動
 - 外国語によるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力の育成
 - 高大連携や企業連携によるSSHの取組の高度化
 - 他の高等学校や小中学校との連携

今後の課題

授業の中でアクティブラーニングをどう取り入れるか？

朝日子で取り組む内容を見直してはどうか？

- ＜素案＞
- 1年：進路学習、学問探究、探求活動
- 2年：探求活動（全教科で対応）
- 3年：プレゼンテーション能力育成、入試問題研究
- 文化祭
- 3年生探求活動の成果をポスターセッションで発表するため、ポスター作成を行うなど。

2016年

10月
 SSH準備委員会結成
 理科(2名)、国、地歴、数、英、家、体の8名
 毎週1回会議

10,12,3月
 職員会議にてSSHについて説明

10月職員会議での説明内容

- 鹿児島中央高校の課題
 変革のきっかけにSSHを利用する
- 鹿児島中央高校がSSH指定校として目指すもの(SSH研究開発テーマ)
 - 日本の未来を担い、世界が求める人材の育成
 ～21世紀の教育のありかたを提案する～(仮題)
 - ① 課題探究型学習の充実
 - ② 新学習指導要領の目的に基づいたカリキュラム、スケジュールの開発
 - ③ 主体的・協働的な学びを指導できる指導法の確立

アドミッションセンター

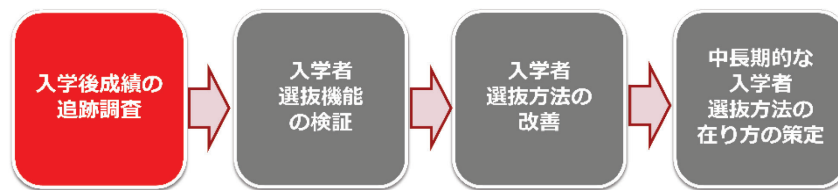
「入試と入学後成績の追跡調査」の実施

(1) 目的

本学の入試分析に関する報告書としては毎年3月に発行する「入学者選抜方法検討委員会報告書」がある。この報告書は各学部の独自の観点で直近の入学試験の結果について分析し、各学部・学科等の入試改善に資するものである。これに対し本追跡調査の目的は、大学全体としての将来的かつ中長期的な入学者選抜方法の在り方の策定に向けて、各学部・学科の

- ◆ 「入試形態別入学者の入試成績と入学後の成績（GPA等）の関係」
- ◆ 「入学後の成績（GPA等）の経年変化」

を調査し、結果をデータとして取りまとめることである。そしてさらに、これらの結果を各学部へ提供することで、各学部・学科等と協働して入学者選抜機能を検証・改善する材料とすることにある。分析結果は各学部・学科等における入学者選抜機能の検証をすることを目的とする。そのため、目的外となる学部・学科等間の比較は本追跡調査では行わない。



(2) 調査概要

入試と入学後4年間の成績・卒業率の関連について、全学部・学科等の入学生を対象として、入試形態別（前期入試、後期入試、AO入試、推薦Ⅰ、推薦Ⅱ）等の尺度を作り分析を行う。ただし、個人情報保護の観点から入学者3名以下の募集単位は分析対象外とする。

- * データを解析する時点で、個人情報（氏名・学籍番号・入試時点の受験番号）は削除し整理番号を付与することで匿名化している。

(3) 調査実績

平成29年度までの3ケ年で、平成19年度、平成22年度、平成23年度、平成24年度、平成25年度の4月入学生について調査を実施し、報告書をまとめ、各学部へ提供している。

(4) これまでの調査結果から得られた主な知見（全体傾向）

- ・ 入試形態別によって入学後の成績に差が見られた。
- ・ 性別によって入学後の成績に差が見られた。
- ・ 入学後の成績（1期）とその後の成績（2期以降）との間に相関関係が見られた。
- ・ 学部・学科等によって4年卒業率に差が見られた。
- ・ 入試には選抜効果が働いているため、入試の順位と入学後の成績の間には相関関係が見られなかった。ただし、今後、低倍率等の募集単位などでの最下位合格者（入学者）については、別途分析が必要となる可能性が残る。

アドミッションセンター

鹿児島大学 平成29年度入試分析

1 全国の動向について

18歳人口の減少傾向に一旦歯止めがかかった平成29年度大学入試センター試験の志願者数は575,967人と前年度の563,768人から12,199人（対前年102.2%）増加した。また、男女別の内訳を見ると、男子が321,496人（対前年102.3%）、女子が254,471人（対前年102.0%）と男女ともに志願者数が増加する入試年度となった。

しかし、志願者の出身高校所在地を基準とした都道府県別に見た場合、鹿児島大学への志願者の中で最も多くの割合を占める鹿児島県の志願者数は7,255人（対前年-112人）、また、鹿児島県と隣接する熊本県では7,097人（対前年-69人）、宮崎県では4,903人（対前年+2人）と南九州エリアについては、全国傾向とは異なり前年度と同様、もしくは減少する傾向が見られた。特に、地元鹿児島県での減少幅が大きく、男女別に見ても男子が4,067人（対前年-56人）、女子が3,188人（対前年-56人）とともに56人ずつ減少する結果となった。一方で、東京都（対前年+2,730人）、兵庫県（対前年+1,515人）、愛知県（対前年+1,434人）、大阪府（対前年+1,154人）などでは前年度に比べて志願者数が増加している。全国的な志願者数の増加は大都市を抱える都府県における志願者数の増加の影響が大きく、志願者動向は都市部と地方部で二極化している傾向が窺われた。

また、志願者数に占める高等学校等卒業見込者（以下、現役志願率）は、81.9%と前年度の82.0%と同様、現役中心の入試が展開された。

平成29年度大学入試センター試験の平均点を見ると、最も変動が大きかったのが国語で対前年-22.43点となった。予備校各社は、第1問の現代文・評論、第2問の現代文・小説がともに難化し解答に苦戦した受験生が多かったことを指摘している。また、化学は3年連続で平均点がダウンし51.94点となり、化学選択者には厳しい結果となった。

国立大学への志願者数を学部系統別に見た場合、文系では「法学・政治学」、理系では「薬学」系統での志願者数の増加が目立った。過去2年は文高理低の傾向が続いていたが、平成29年度入試では文系・理系内でそれぞれ実学志向の学部系統に人気が集まる傾向が見られた。

2 鹿児島大学全体の動向について

平成29年度入試における鹿児島大学全体の動向を、以下の6点から分析した。

- (1) 志願者数減少の主な要因
- (2) 志願者数の推移（5カ年）
- (3) 実質倍率の推移（前期日程・5カ年）
- (4) 実質倍率と合格者最低得点率との関係（前期日程・5カ年）
- (5) 志願者数及び合格者数の出身高校所在地別分布について
- (6) 現役割合の推移

(1) 志願者数の減少の主な要因

志願者数を大幅に減らしてしまったことが、鹿児島大学における平成29年度入試の最大の特徴といえる。表1-1は前期日程、後期日程、AO、推薦Ⅰ、推薦Ⅱの各入試形態別の平成28年度入試から平成29年度入試の志願者数の推移を鹿児島県内と県外に分けて示している。まず、差(H29-H28)の合計を見ると、県内で-293人、県外で-995人と主に県外からの志願者数が大幅に減少していることがわかる。次に、その県外からの志願者数の増減を入試形態別に見ていくと、AO、推薦Ⅰでは増加し、推薦Ⅱでは前年度並みだったのに対し、前期日程では-627人、後期日程では-396人と募集人員が多い入試形態での志願者数減少が顕著であった。

表1-2は各学部における平成28年度入試から平成29年度入試の志願者数の推移を示している。学部ごとの差(H29-H28)の合計に注目すると、全ての学部で志願者数を減らしており、特に医学部、教育学部での減少幅が大きいことが確認できる。

表1-1 入試形態別 志願者数推移

		H28入試						H29入試						差 (H29-H28)					
		前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計	前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計	前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計
県内	人数	1700	1363	23	66	261	3413	1523	1230	22	70	275	3120	-177	-133	-1	4	14	-293
	割合	45.5%	48.7%	42.6%	48.9%	62.3%	47.8%	51.9%	54.3%	36.7%	43.5%	63.7%	53.3%	6.4%	5.5%	-5.9%	-5.4%	1.4%	5.5%
県外	人数	2040	1433	31	69	158	3731	1413	1037	38	91	157	2736	-627	-396	7	22	-1	-995
	割合	54.5%	51.3%	57.4%	51.1%	37.7%	52.2%	48.1%	45.7%	63.3%	56.5%	36.3%	46.7%	-6.4%	-5.5%	5.9%	5.4%	-1.4%	-5.5%
合計	人数	3740	2796	54	135	419	7144	2936	2267	60	161	432	5856	-804	-529	6	26	13	-1288

表1-2 学部別 志願者数推移

	H28入試						H29入試						差 (H29-H28)					
	前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計	前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計	前期	後期	AO	推薦Ⅰ	推薦Ⅱ	合計
法文	784	531			154	1469	691	481			193	1365	-93	-50			39	-104
教育	507	413		7	109	1036	344	316		9	47	716	-163	-97		2	-62	-320
理	270	178	51	24		523	214	159	47	26		446	-56	-19	-4	2		-77
医	639	547		42	43	1271	438	338		58	43	877	-201	-209		16	0	-394
歯	160	91			10	261	91	125			14	230	-69	34		0	4	-31
工	722	420		23	92	1257	616	383		21	120	1140	-106	-37		-2	28	-117
農	337	172		27		536	289	130		27		446	-48	-42		0	0	-90
水産	194	336	3	12		545	167	255	13	20		455	-27	-81	10	8	0	-90
共同獣医	127	108			11	246	86	80			15	181	-41	-28			4	-65
合計	3740	2796	54	135	419	7144	2936	2267	60	161	432	5856	-804	-529	6	26	13	-1288

これらの志願者数減少の主な要因について鹿児島県内の高等学校、及び予備校の進路指導担当教員にヒアリング調査を行ったところ、以下の4点について指摘があった。

① 予備校各社が算出した鹿児島大学合格ラインの上昇

予備校各社の鹿児島大学の判定(ボーダーライン)が全般的に前年度入試より上がったため、チャレンジ層を中心に鹿児島大学への出願を諦めた受験生が多かった。特に、県外からの受験者は判定値への依存度が高く、より合格の可能性が高い大学へ出願する傾向が強いため、県外の受験生を中心に鹿児島大学が敬遠された。

② 鹿児島県における受験生のセンター試験平均点ダウンの影響

鹿児島県は例年、国語の平均点が全国平均と比べ高かったが、今年度のセンター試験においては国語の平均点ダウン（-22.43点）の影響を強く受けてしまった。特に、鹿大を受験するボリュームゾーンといえる得点率60-65%前後の受験生が思ったように得点できず鹿児島大学への出願を断念したケースが多かった。自己採点段階での県内からの志望者数は前期・後期ともそれぞれ100人程度減少していたが、これを高校別に見ると、上位の進学校群では志望者数に大きな変化が見られなかったものの、中堅の進学校群で志望者数の減少幅が大きい傾向が見られた。

③ 改組による影響

1) 教育学部

- ・生涯教育総合課程の廃止（定員減）の影響（約-160人）。
- ・改組により中等教育コースの一募集単位あたりの募集人員がさらに減ったため出願しにくかった。

2) 法文学部

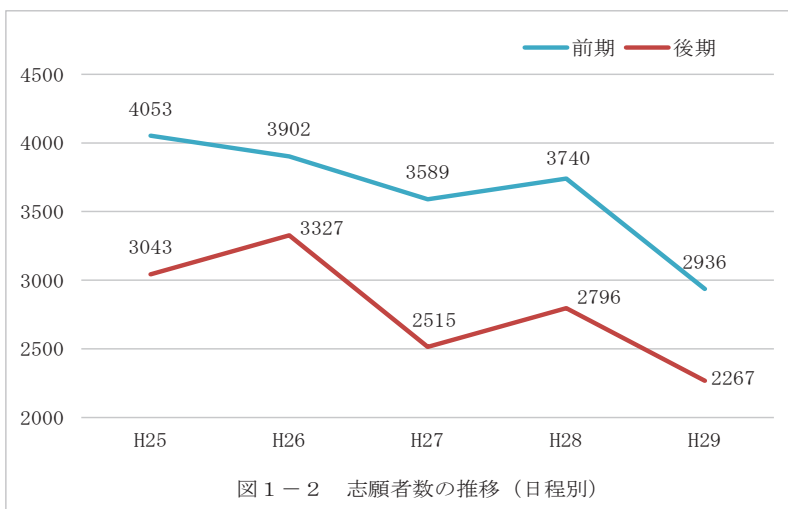
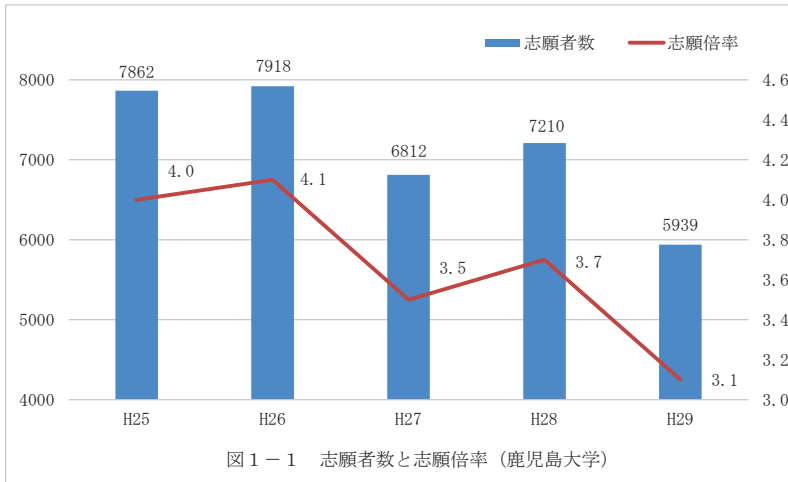
- ・教育学部生涯教育総合課程地域社会教育専修から移動した形となった法経社会学科地域社会コースについて、教育学部から法文学部が変わることから難易度が上がると警戒され、教育学部のときほど志願者数が集まらなかった。

④ 医学部医学科における合否の読みにくさ

- ・1段階選抜への警戒
- ・センター試験で高得点を取っても、面接の点数が読みにくい
（予備校や高校側の想定よりも低い点数が出る生徒（浪人生）がしばしばいる）
- ・浪人生は不利といううわさ

（2）志願者数の推移（5カ年）

平成28年度入試では、前年度入試からの揺り戻し等によって志願者数は7,210人まで回復したが、平成29年度入試においては一転して、募集人員の多い前期日程と後期日程を合わせて1,333人の志願者数減少となり、志願者総数は5,939人と過去5カ年の中ではじめて6,000人を下回る厳しい結果となった（図1-1, 1-2）。また、志願者数の大幅な減少に伴い志願倍率も前年度入試の3.7倍から3.1倍へとダウンした。



(3) 実質倍率の推移 (前期日程・5カ年)

① 2倍未満の募集単位数が66%

鹿児島大学の一般入試前期日程について、全募集単位の過去5カ年の実質倍率(受験者数/合格者数)の推移を見たところ、平成29年度入試では、実質倍率が3.0倍以上、及び2.0-2.9倍の募集単位数が減少し、1.6-1.9倍、及び1.5倍以下の募集単位数が増加した(図1-3、表1-3)。これは、主に全学的な志願者数減少の影響を受けた結果であると考えられる。

② 実質倍率1.5倍以下の募集単位一覧

一般入試前期日程の全募集単位について、過去5カ年の実質倍率(受験者数/合格者数)が1.5倍以下となった募集単位を抽出したところ、26の募集単位が該当した。学部別に募集単位数の内訳を見ると、法文(1)、教育(8)、理(3)、医(2)、工(5)、農(4)、水産(3)であった(表1-4)。

また、26の募集単位における実質倍率が過去5カ年で何回1.5倍以下となったのかを見たところ、4回が1募集単位、3回が2募集単位あった。これらの募集単位は実質倍率の低下が隔年現象ではなく、恒常的になる可能性も考えられることから、実質倍率向上のための施策が必要であると考えられる。

③ 今後の検討課題

実質倍率の入試年度による変動幅の是正や、低倍率解消への対応としては、括り入試による少人数募集の解消や、推薦入試Ⅱ等で一般入試前期日程の実施前に入学者を現在より多く確保し、一般入試前期日程の募集人員を減らすことで、実質倍率の低下傾向に歯止めをかける等の取り組みが考えられる。これらが今後の検討課題となると思われる。

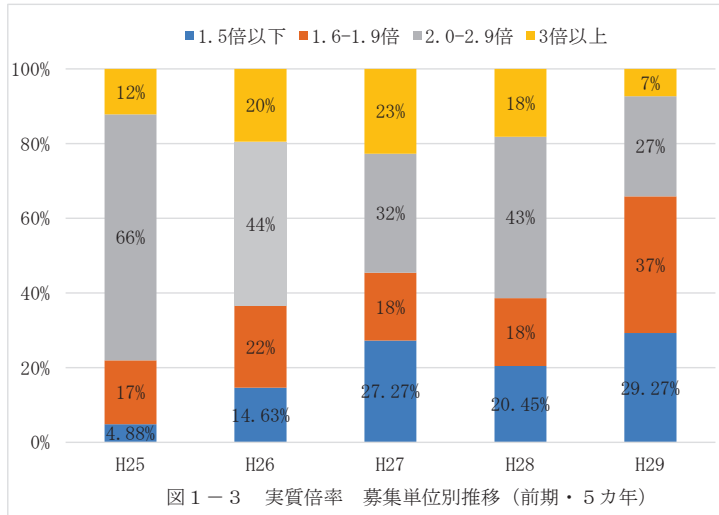


表1-3 実質倍率別 募集単位数の推移 (前期日程)

	H25	H26	H27	H28	H29
1.5倍以下	2	6	12	9	12
1.6-1.9倍	7	9	8	8	15
2.0-2.9倍	27	18	14	19	11
3.0倍以上	5	8	10	8	3
合計	41	41	44	44	41

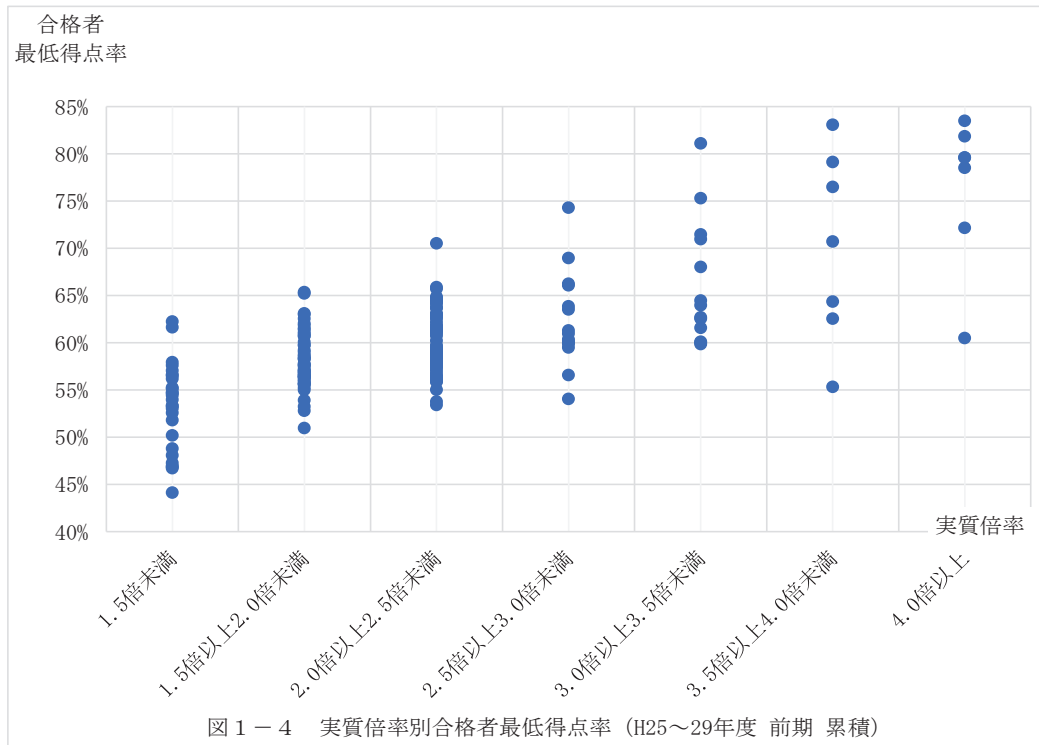
* 数値は募集単位数を示す。

表1-4 実質倍率1.5倍以下の募集単位一覧 (前期日程)

学部	学科・専攻・コース	H25	H26	H27	H28	H29
法文	法経社会／法学コース	2.1	1.3	1.9	1.7	1.9
教育	学校／国語	2.1	1.2	2.4	0.9	2.3
教育	学校／社会	2.1	1.0	2.6	2.4	2.4
教育	学校／英語	2.0	1.2	3.1	0.9	1.8
教育	学校／技術	2.0	2.8	1.8	5.0	1.4
教育	学校／音楽	2.4	2.3	1.2	2.3	1.9
教育	学校／美術	1.2	2.0	1.5	1.1	1.4
教育	学校／教育学	2.4	3.4	1.3	2.0	
教育	学校／心理学	2.6	2.4	1.9	1.2	
理	教理情報科学	2.3	2.2	1.7	1.5	1.8
理	物理科学	2.7	1.7	3.2	2.1	1.3
理	生命化学	1.6	2.4	2.2	1.4	1.3
医	保健／理学療法	2.8	3.4	2.9	2.5	1.5
医	保健／作業療法	1.5	2.4	3.1	2.0	2.9
工	機械	1.9	1.6	1.7	1.8	1.3
工	電気電子	2.1	1.8	1.5	1.4	1.5
工	環境化学プロセス	1.7	1.6	1.5	1.3	1.2
工	海洋土木	2.2	2.3	1.4	2.0	1.7
工	情報生体システム	1.6	1.4	1.2	1.8	1.6
農	国際食料資源学特別コース			3.2	1.9	1.5
農	農業生産科学	2.2	1.5	2.5	1.6	1.3
農	食料生命科学	1.8	1.7	1.4	1.3	1.8
農	農林環境科学	2.2	3.4	1.3	2.1	1.3
水産	国際食料資源学特別コース			1.3	2.0	1.3
水産	水産／水産資源科学			1.5	2.3	1.7
水産	水産／食品生命科学			1.2	1.8	2.2

(4) 実質倍率と合格者最低得点率との関係（前期日程・5カ年）

過去5カ年の前期日程の各募集単位について、実質倍率と合格者最低得点率との関係を見たところ、実質倍率が低いと合格者最低得点率も低いケースが多く見られた。特に、合格者最低得点率が50%を下回った全ての募集単位において実質倍率が1.5倍を下回る結果となった（図1-4）。

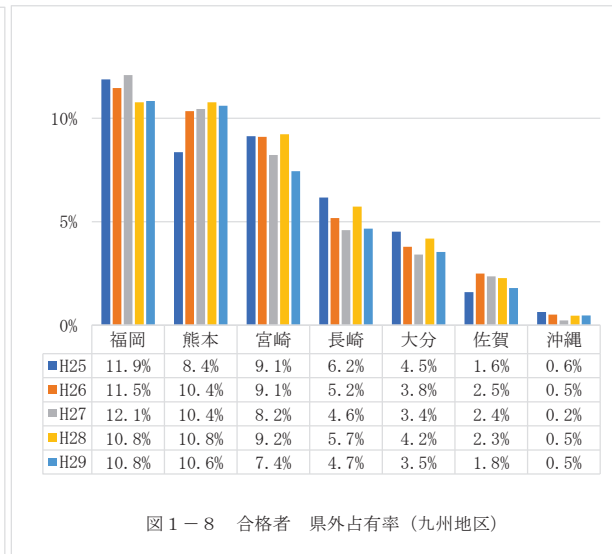
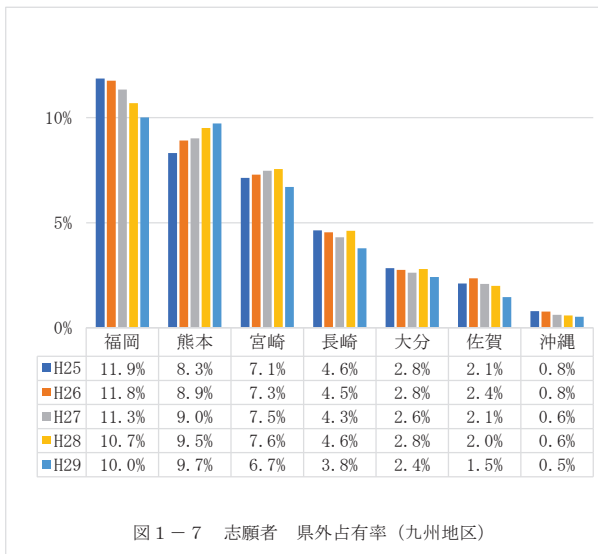
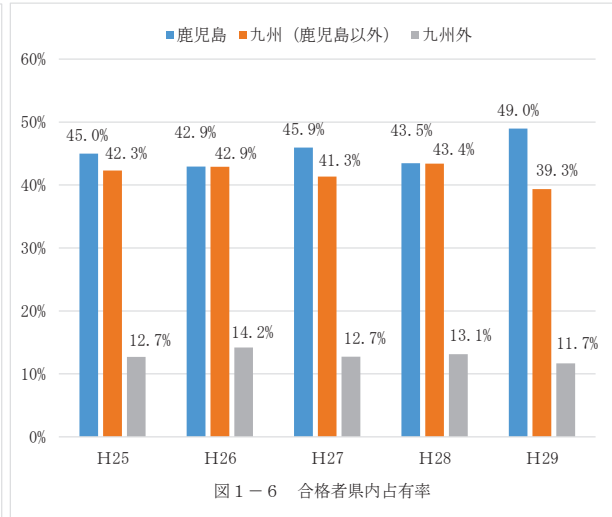
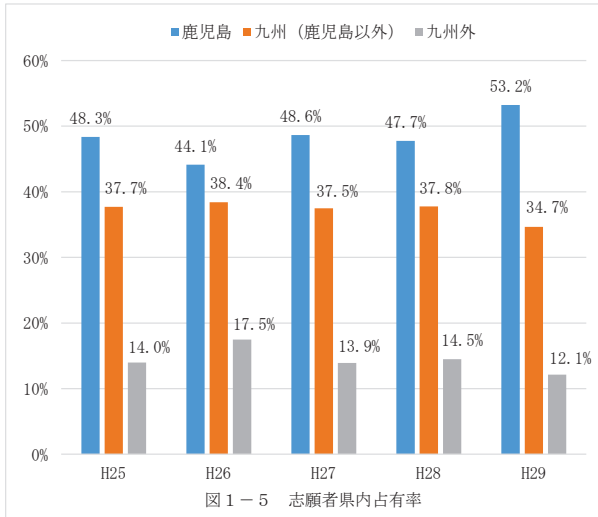


(5) 志願者数及び合格者数の出身高校所在地別分布について

平成29年度入試では、志願者数・合格者数とも県内占有率が5ポイント以上アップした（図1-5, 1-6）。特に、志願者数における県内占有率は53.2%と過去5カ年ではじめて50%を超えた。また、合格者数における県内占有率も49.0%と合格者の半数近くを鹿児島県内の高校出身者が占める入試年度となった。

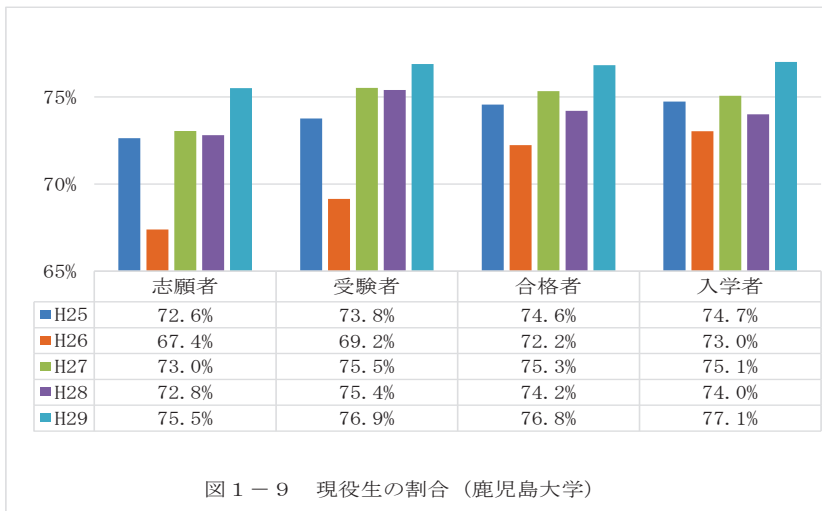
一方、鹿児島県を除く九州地区の平成29年度入試における県別占有率を見ると、志願者数では熊本県を除く各県で占有率が低下した。また、合格者数では宮崎県の占有率が7.4%と前年度の9.2%から1.8ポイント低下した（図1-7, 図1-8）。

また、志願者数と合格者数の占有率を比較した場合、沖縄県を除き各県とも合格者数の占有率の方が高いことが特徴として挙げられる。これは、鹿児島県の志願者数、合格者数の占有率とは反対の傾向を示している。要因としては、九州地区の県外からの志願者は鹿児島県内からの志願者と比較した場合、合格可能性についてある程度の見通しを持った上で鹿児島大学に出願していることが考えられる。



(6) 現役割合の推移

平成29年度入試では、志願者数、受験者数、合格者数、入学者数に占める現役生の割合が75.5%、76.9%、76.8%、77.1%と過去5カ年でそれぞれ最も高くなった。志願者数、受験者数、合格者数、入学者数とも現役生が全体の3/4以上を占め、現役生中心の入試が加速された。



アドミッションセンター

鹿児島大学主催 単独説明会の実施

(1) 実施の狙い

1. 地域貢献と地域連携の強化。
特に、鹿児島県の地方部（離島を含む）に居住する高校生・高校教員との連携強化。
2. 鹿児島大学のステークホルダーに対して、鹿児島大学を理解してもらう機会の創出。

(2) 開催方針

大学に触れる機会の少ない鹿児島県内の地方部で、鹿児島大学への志望者が多い地域での開催を優先する。

(3) プログラム

<第一部>

1. 鹿児島大学の教育と研究
2. 鹿児島大学の入試の特徴
3. 鹿児島大学の学生生活（授業料減免・奨学金等）と就職支援
4. 鹿大生からのメッセージ（大学生活紹介・合格体験談等）

<第二部>

5. 個別相談会（学部別・入試・生活・就職ブース）

(4) 開催実績

<2015（平成 27）年度>

- ・奄美大島会場（鹿児島県立大島高等学校） 2015年6月27日（土）開催
- ・種子島会場（鹿児島県立種子島高等学校） 2015年7月4日（土）開催
- ・北薩会場（川内ホテル） 2015年7月26日（日）開催

<2016（平成 28）年度>

- ・奄美大島会場（鹿児島県立大島高等学校） 2016年7月2日（土）開催
- ・大隅会場（鹿児島県立鹿屋高等学校） 2016年7月9日（土）開催
- ・種子島会場（種子島中央高等学校） 2016年7月22日（金）開催
* 第一部（1～3）のみ

<2017（平成 29）年度>

- ・種子島会場（鹿児島県立種子島高等学校） 2017年7月8日（土）開催
- ・奄美大島会場（鹿児島県立大島高等学校） 2017年7月15日（土）開催
- ・指宿会場（鹿児島県立指宿高等学校） 2017年7月22日（土）開催

(5) アンケート結果（平成 29 年度）

3会場とも参加者の全体評価が5段階で4.5を超えており、満足度の高い結果となった。

	種子島会場 (種子島中央高校)	奄美大島会場 (大島高校)	指宿会場 (指宿高校)
参加者数	59	69	64
全体評価（5段階）	4.82	4.57	4.63

アドミッションセンター

高等学校での大学説明会の実施

(1) 実施の狙い

南九州地域（鹿児島県・宮崎県・熊本県）からの安定的な志願者確保のため。高校生に対し、鹿児島大学の教職員が直接高校を訪問し、教育・研究や入試内容を説明することで、鹿児島大学への理解と共感を深めてもらう機会とする。

(2) 概要

<実施時期>

入学者選抜要項公表後の7月中旬から9月下旬

<形式>

鹿児島大学の教職員が高等学校を訪問し直接生徒に説明を行う。

<説明内容>

- ・ 入試説明（教科・科目及び配点、主な変更点）
- ・ 教育・研究内容（本学が派遣する教員の特色ある研究紹介等）
- ・ 学生生活（入学金・授業料（免除制度も含む）、奨学金、サークル活動、学生寮）
- ・ 就職状況
- ・ その他（高等学校からの要望事項）

(3) 導入によって期待される効果

南九州地域（鹿児島県・宮崎県・熊本県）から、鹿児島大学で学びたいという強い意欲を持った志願者の増加。

(4) 平成29年度実績

番号	月 日	高等学校等名	参加生徒数	担当学部等
1	7/10(月)	熊本県立宇土高等学校	61	アドミッションセンター、入試課
2	7/14(金)	鹿児島県立大島高等学校	30	農学部
3	7/20(木)	熊本県立東稜高等学校	31	アドミッションセンター、入試課
4	7/25(火)	鹿児島県立松陽高等学校	50	法文学部
5	7/25(火)	鹿児島県立出水高等学校	31	教育学部
6	7/26(水)	尚志館高等学校	90	アドミッションセンター、入試課
7	7/27(木)	鹿児島県立国分高等学校	39	教育学部
8	7/27(木)	志學館高等部	24	医学部
9	7/31(月)	福岡県立筑紫中央高等学校	14	アドミッションセンター、入試課
10	8/4(金)	鹿児島県立鹿児島南高等学校	65	工学部
11	8/18(金)	鹿児島県立徳之島高等学校	30	理学部
12	8/4(金)	熊本県立第二高等学校	36	アドミッションセンター、入試課
13	8/29(火)	熊本県立芦北高等学校	26	農学部
14	10/4(水)	熊本県立高森高等学校	24	農学部
計 14校			551	

アドミッションセンター

高等学校等からの大学訪問受け入れの実施

(1) 実施の狙い

将来の受験候補者や受験候補者を指導する指導教員、ならびに、将来の受験候補者の保護者に実際に鹿児島大学のキャンパスに来ていただき、鹿児島大学を体感していただくことで、受験候補者の裾野を広げるため。

(2) 概要

<実施時期>

2017年5月～12月

<形式>

鹿児島大学教職員からの大学概要説明、およびキャンパス内の見学。

その他、訪問校のニーズに沿って可能な範囲で対応する。

(3) 平成29年度実績

番号	月 日	高等学校等名	学年等	訪問者数				説明者
				生徒等	教諭	保護者	計	
1	6/27(火)	宮崎県立宮崎北高校	PTA		2	27	29	学長補佐
2	6/30(金)	鹿児島県立串木野高校	PTA		4	14	18	学長補佐
3	6/30(金)	鹿児島県立武岡台高校	PTA		2	51	53	アドミッションセンター
4	7/3(月)	鹿屋中央高校	PTA		2	22	24	入試課
5	7/4(火)	鹿児島県立伊集院高校	PTA		3	65	68	学長補佐
6	7/4(火)	宮崎県立都城西高校	PTA		3	22	25	学長補佐
7	7/5(水)	鹿屋市立鹿屋女子高校	2年生	19	2		21	学長補佐、法、教、理
8	7/5(水)	鹿屋市立鹿屋女子高校	2年生	20	1		21	医(保)
9	7/14(金)	鹿児島県立川内高校	PTA		4	55	59	アドミッションセンター
10	7/14(金)	日置市立土橋中学校	全校生徒	32	10		42	アドミッションセンター
11	7/19(水)	出水中央高校	1年生	44	3		47	農、工
12	7/25(火)	鹿児島県立加治木高校	PTA		2	61	63	学長補佐
13	10/3(火)	鹿児島市立鹿児島玉龍中学校	PTA	69	2		71	アドミッションセンター
14	10/4(水)	鹿児島県鹿屋高校	PTA		2	48	50	アドミッションセンター
16	10/20(金)	伊佐市立大口中央中学校	PTA		1	15	16	学長補佐
17	11/1(水)	鹿児島県立川辺高校	1年生	91	9		100	アドミッションセンター
18	11/14(火)	鹿児島県立指宿高校	1年生	81	4		85	アドミッションセンター
19	11/15(水)	鹿児島県立国分高校	1年生	306	16		322	アドミッションセンター、法、農
20	11/16(木)	鹿児島県立喜界高校	生徒	6	1		7	アドミッションセンター
21	11/17(金)	熊本県立北陵高校	PTA		1	5	6	アドミッションセンター
22	12/8(金)	鹿児島県立明桜館高校	1年生	55	2		57	学長補佐、法、工
23	12/14(木)	鹿児島県立川薩清修館高校	1年生	23	3		26	アドミッションセンター
本年度合計 23校				746	79	385	1210	
(参考)平成28年度 31校				1373	120	380	1873	

アドミッションセンター

秋季オープンキャンパスの実施

(1) 実施の狙い

オープンキャンパスは例年8月上旬の夏季に開催をしているが、本年から、秋季にも開催する。本学の魅力について高校生に情報提供することで、本学に一層の興味・関心を持ってもらい、志願者増に結びつけるとともに、魅力ある講義等を体験してもらうことで、参加者に本学では是非学びたいという動機付けを図る。

(2) 概要 (2017 (平成 29) 年度)

<対象>

高校生、保護者、高校教諭

<実施日時・場所>

大学祭期間中に実施

2017年11月11日(土) 13時~17時 稲盛会館

<内容>

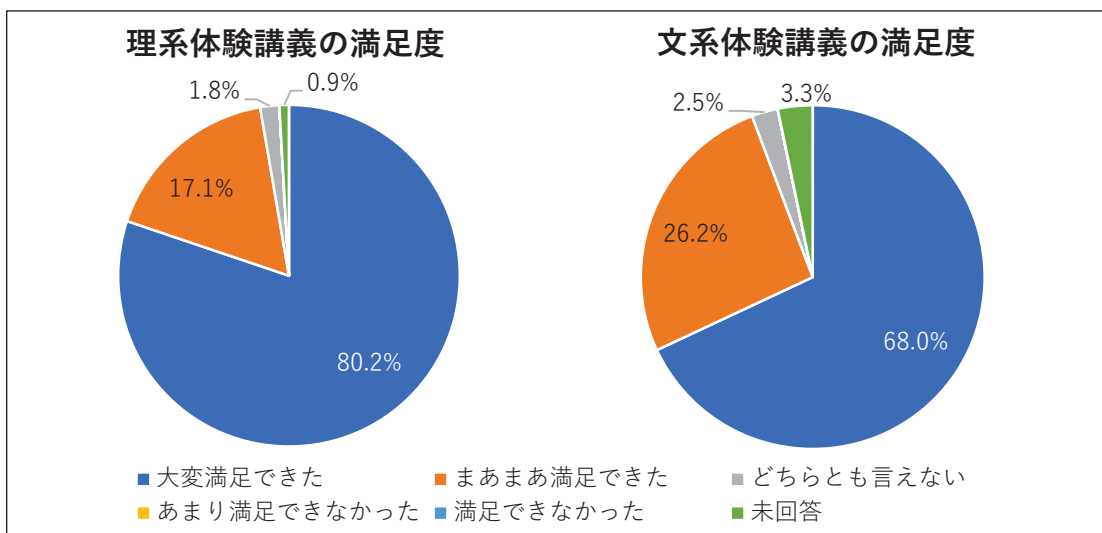
- ・ 体験講義 (文系・理系)
- ・ 学部別キャンパス探検 (郡元キャンパスの6学部)
- ・ 大学進学相談会 (全学部)



(3) 平成 29 年度実績とアンケート結果

開催日時	参加者数
体験講義 (理系) : 14時~15時15分	136
体験講義 (文系) : 15時30分~16時45分	134
学部別キャンパス探検 : 14時~16時45分	150
大学進学相談会 : 13時~17時	47
合計	467

体験講義においては、ほとんどの参加者が「満足できた」と回答している。



アドミッションセンター

アドミッションセンター運営委員会実績

第1回AC運営委員会

日 時：平成29年4月5日（水）
13：00～14：30

<議題>

- 1 平成29年度年度計画について
- 2 平成29年度学長裁量経費計画調書について

<報告>

- 1 アドミッションセンター運営委員会規則・名簿
- 2 平成29年度入学手続き者について
- 3 全学共用スペースの公募結果について
- 4 平成29年度学内予算配賦について
- 5 外部英語試験の取材について

第2回AC運営委員会

日 時：平成29年4月17日（月）
10：30～12：00

<議題>

- 1 鹿児島大学単独説明会2017について
- 2 平成29年度単独説明会・九州地区国立大学合同説明会出席予定者について
- 3 平成29年度鹿児島大学単独説明会、九州地区国立大学合同説明会の開催について（依頼）
- 4 平成29年度入試と入学後成績の追跡調査について
- 5 国立大学アドミッションセンター連絡会議第15回総会の開催について
- 6 多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウムについて
- 7 入学者選抜方法の変更について

<報告>

- 1 平成29年度入試・平成28年度入試高校別合格者数について
- 2 第26回東北大学高等教育フォーラムについて

第3回AC運営委員会

日 時：平成29年5月11日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 平成30年度概算要求について
- 2 鹿児島大学トップセミナー（7月13日）について
- 3 高校教員との意見交換について
- 4 平成29年度「入試と入学後成績の追跡調査」の新調査・分析項目について
- 5 平成28年度基幹運営費交付金（機能強化経費）報告について
- 6 平成28年度学長裁量経費報告書について
- 7 入試広報について

<報告>

- 1 平成25～29年度合格者最低得点率と実質倍率について
- 2 鹿児島大学2017年度入試 外部英語試験申請（利用）率について
- 3 第2回多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウムの開催について
- 4 平成29年度鹿児島大学単独主催説明会、九州地区国立大学合同説明会（国立大学協会九州支部主催）の開催について

第4回AC運営委員会

日 時：平成29年5月22日（月）
16：10～17：40

<議題>

- 1 平成29年度九州地区国立大学合同説明会の開催について
- 2 教育改革室会議入試等部門会議について

<報告>

- 1 2018年受験生のための大学案内について
- 2 第2回多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウム出席者について
- 3 2017年度入試主要大学出願結果/各都道府県から東京都・大阪府・福岡県への大学進学者数

第5回AC運営委員会

日 時：平成29年6月8日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 入学者選抜方法の変更等について
- 2 入試等部門会議について
- 3 教育研究評議会（6月15日）の説明について

<報告>

- 1 2018年受験生のための大学案内について
- 2 九州地区国立大学・高等学校連絡協議会について
- 3 第2回多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウム出席者等について
- 4 鹿児島大学単独主催説明会・九州地区国立大学合同説明会（国立大学協会九州支部主催）出席者について
- 5 第5回（2017年度）テレメール全国一斉進学調査概要
- 6 国大協の入学者選抜に関する基本方針について

第6回AC運営委員会

日 時：平成29年6月22日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 佐賀大学アドミッションセンターからの検討依頼について

<報告>

- 1 第2回多面的・総合的能力の育成と入試を考えるシンポジウムアンケート集計結果
- 2 甲南高校の記事
- 3 鹿児島大学トップセミナーについて
- 4 鹿児島大学単独主催説明会について
- 5 九州地区国立大学合同説明会（国立大学協会九州支部主催）について

第7回AC運営委員会

日 時：平成29年7月6日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 九州地区国立大学 オープンキャンパス高校生アンケート共同調査研究（依頼）（大分大学入学企画支援センター）について
- 2 セカンドオープンキャンパス2017（仮称）の開催について
- 3 鹿大インターネット出願について

<報告>

- 1 アドミッションセンターと学部入試委員会委員との意見交換会概要について
- 2 理学部物理科学科オープンキャンパスでの取り組みについて
- 3 国立大学入試担当課長会議報告について
- 4 鹿児島大学トップセミナーについて
- 5 LINEの登録者推移等について

第8回AC運営委員会

日 時：平成29年7月20日（木）
9：30～10：50

<議題>

- 1 セカンドオープンキャンパス2017（仮称）の開催について
- 2 鹿児島大学トップセミナー（9月21日）について
- 3 志願者1,333人減への対応策（案）入試関係について

<報告>

- 1 アドミッションセンターと学部入試委員会との意見交換会について
- 2 平成29年度九州地区合同説明会事後アンケート調査票について

第9回AC運営委員会

日 時：平成29年8月3日（木）
13：30～15：00

<議題>

- 1 「ひらく日本の大学」調査（朝日新聞社&河合塾）について
- 2 多面的・総合的評価入試概要（案）について
- 3 平成29年度九州地区合同説明会事後アンケート調査票について
- 4 テレメール全国一斉進学調査（フロムページ）の活用について
- 5 「秋季オープンキャンパス2017」の実施計画について
- 6 多面的・総合的評価における提出書類等の改善について
- 7 志願者1,333人減への対応策（案）入試関係について
- 8 インターネット出願について

<報告>

- 1 高大意見交換会（8月29日）について
- 2 鹿児島大学単独説明会アンケート集計結果について
- 3 九州地区国立大学合同説明会について
- 4 オープンキャンパスの視察について

第10回AC運営委員会

日 時：平成29年8月24日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（案）に関する学部意見対応について
 - ・ 多面的・総合的入試 医学科入試委員会での説明について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（修正案）について
- 2 多面的・総合的評価における提出書類等の改善について
- 3 「秋季オープンキャンパス 2017」（11月11日）について
 - ・ アンケートについて
 - ・ リーフレットについて
- 4 志願者 1,333 人減への対応策（案）入試関係について

<報告>

- 1 高大意見交換会（8月29日）について
- 2 鹿児島大学トップセミナー（9月21日）について
- 3 鹿児島県中学校卒業（予定）者数の推移について

第11回AC運営委員会

日 時：平成29年9月6日（水）
10：00～11：30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（案）に関する学部意見対応について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（修正案）について
- 2 「秋季オープンキャンパス 2017」（11月11日）について
 - ・ リーフレットについて
- 3 鹿児島大学トップセミナー（10月12日）について

- 4 志願者 1,333 人減への対応策（案）入試関係について

<報告>

- 1 鹿児島大学トップセミナー（9月21日）について
- 2 平成29年度九州地区国立大学合同説明会事後アンケート調査票

第12回AC運営委員会

日 時：平成29年9月20日（水）
16：00～17：30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（修正案）について
 - ・ 多面的・総合的評価入試概要（案）に関する学部意見対応について
- 2 「秋季オープンキャンパス 2017」（11月11日）について
 - ・ リーフレットについて
 - ・ アンケートについて
- 3 志願者 1,333 人減への対応策（案）入試関係について
- 4 アドミッションセンター教職員と離島出身学生との懇談会について

<報告>

- 1 鹿児島大学トップセミナー（9月21日）について
- 2 平成30年以降の九州地区国立大学合同説明会について
- 3 平成29年度第1回九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会合同説明会部会の開催について
- 4 シンポジウム「大学入学者選抜の新展開」について

第13回AC運営委員会

日 時：平成29年9月20日（水）
16：00～17：30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
 - ・ 「多面的・総合入試の導入について（要望）」への対応について
 - ・ 共同獣医学部の多面的・総合的入試の導入について

- 2 「秋季オープンキャンパス 2017」(11月11日)について
- ・ アンケートについて
 - ・ リーフレットについて
- 3 国大協からの意見照会について
- 4 志願者 1,333 人減への対応策(案)入試関係について

<報告>

- 1 資格試験による単位認定基準について
- 2 鹿児島大学トップセミナー(10月12日開催)について
- 3 トップセミナー(平成29年度入試の分析)に関する学部説明について
- 4 大学入試センターシンポジウム2017プログラムについて
- 5 文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業(主体性等分野)実証事業説明会について
- 6 平成29年度佐賀大学FD講演会&研究会開催について
- 7 アドミッションセンターのサイトについて
- 8 総合教育機構ホームページについて
- 9 LINEの登録者推移について

第14回AC運営委員会

日 時：平成29年10月19日(木)
10:00~11:30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
- 2 大学入学共通テストプレテスト実施に関する準備について
- 3 入試等部門会議について
- 4 志願者 1,333 人減への対応策(案)入試関係について

<報告>

- 1 学部からの「多面的・総合入試の導入について(要望)」への対応について
- 2 2017年度国立4大学合同入試直前相談会について
- 3 「国立大学協会の基本方針(案)」及び「ガイドライン(骨子案)」等に関する会員大学への意見照会の結果について
- 4 入試と入学後成績の追跡調査について
- 5 秋季オープンキャンパス2017のアンケートについて
- 6 秋季オープンキャンパス2017の申込み状況について

第15回AC運営委員会

日 時：平成29年11月2日(木)
10:00~11:30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
- 2 括り入試の全学的検討について
- 3 平成30年度大学入試センター試験における総合教育機構所属職員の派遣について

<報告>

- 1 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会合同説明会部会会議について
- 2 秋季オープンキャンパス2017について
- 3 LINEの登録者推移について

第16回AC運営委員会

日 時：平成29年11月13日(木)
13:00~14:00

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
- 2 多面的・総合的評価入試に関する学部への質問対応について
- 3 「括り入試」の全学的検討について

<報告>

- 1 読売教育改革フォーラム2017について
- 2 佐賀大学FD講演会及び九州地区国立大学アドミッション研究会について
- 3 国公立大学高大接続改革 情報交換会について
- 4 秋季オープンキャンパス2017の参加者数

第17回AC運営委員会

日 時：平成29年12月7日(木)
10:00~11:30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
- 2 「JAPAN e-Portfolio」の各大学等における取扱に関する調査について
- 3 トップセミナー(平成29年度入試の分析)に関する学部説明について

<報告>

- 1 自己推薦型入試(仮称)検討状況について
- 2 総合教育機構ホームページについて
- 3 大学入学者選抜について
- 4 入試直前相談会 in 博多について
- 5 入試直前激励号&バナー広告について
- 6 「括り入試」の全体的検討について

第18回AC運営委員会

日 時：平成29年12月21日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 多面的・総合的評価入試について
- 2 入試と入学後成績の追跡調査について
- 3 アドミッションセンターの年度計画について
- 4 アドミッションセンターの予算について
- 5 大学入試センターが大学の求めに応じ記述式問題等を提供する方式に関する試行調査について
- 6 テレメール全国一斉進学調査について

<報告>

- 1 「JAPAN e-Portfolio に関するアンケート結果」について
- 2 九州地区アドミッション研究会の開催について
- 3 一般入試日の生協中央食堂での取り組みについて
- 4 河合塾2017年「年3回全統記述模試（10月実施）」データ
- 5 アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会について
- 6 LINE登録者推移について

第19回AC運営委員会

日 時：平成30年1月11日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 第1回教育改革室会議「拡大入試等部門会議」について
- 2 アドミッションセンターの年度計画

<報告>

- 1 フロムページ広告について
- 2 入試直前相談会 in 博多について
- 3 九州地区アドミッション研究会について

第20回AC運営委員会

日 時：平成30年1月22日（月）
13：00～14：00

<議題>

- 1 「自己推薦型入試」について
- 2 大学入試センターが大学の求めに応じ記述式問題等を提供する方式に関する試行調査について
- 3 「JAPAN e-Portfolio」(JeP) に関する参加意向調査について

<報告>

- 1 監事監査について
- 2 センター試験自己採点 鹿児島大学志望者分布と判定ラインについて
- 3 アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会について

第21回AC運営委員会

日 時：平成30年2月1日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 「第2回拡大入試等部門会議」について

<報告>

- 1 入試と入学後成績の追跡調査について
- 2 平成30年度一般志願出願状況について
- 3 LINEの登録者推移について

第22回AC運営委員会

日 時：平成30年2月15日（木）
10：00～11：30

<議題>

- 1 大学入試改革シンポジウムについて
- 2 「英語認定試験及び大学入学共通テストの記述式問題の活用に関するガイドライン（案）」に関する意見照会について（依頼）

<報告>

- 1 第2回教育改革室会議「拡大入試等部門会議」について
- 2 監事監査（ヒアリング）について
- 3 国立大学の平成30年度入試状況について
- 4 平成30年度年度計画について

第23回AC運営委員会

日時：平成30年3月1日（木）

10：00～11：30

<議題>

- 1 「多面的総合的評価入試」等に関する記者発表について
- 2 人事案件について
- 3 2018年度アドミッションセンター活動計画について
- 4 アドミッションセンター機能強化について
- 5 平成33年度入試からの大学入学共通テストにおける外部英語試験の活用について

<報告>

- 1 国立大学の平成30年度入試状況について
- 2 推薦・AO入試の募集人員の割合（平成30年度入試）について
- 3 出身高校の所在地県別入学者数（国立大学）について
- 4 鹿児島大学離島地域進学率向上のための連絡協議会について

第24回AC運営委員会

日時：平成30年3月16日（金）

13：30～15：30

◇ケンブリッジ英検説明会

13：30～14：20

<報告>

- 1 「多面的総合的評価入試」等に関する記者発表について
- 2 「第3回拡大入試等部門会議」について

アドミッションセンター

教 員 紹 介

清 原 貞 夫（教育担当理事・副学長・アドミッションセンター長）

2014年4月のアドミッションセンター設置以来、4年間に渡ってセンター長を務めさせていただいております。大学は今、専門性を踏まえた多様な視点から課題解決に挑み続ける人材の輩出と、その基盤となる教育の質保証が求められています。その中で、アドミッションセンターでは、多様なあふれる人材に入学していただけるための入試改革を推進しています。2020年度入試から多面的・総合的入試として導入する自己推薦型入試もその一つです。更なる入試制度の充実と改革に向けて、教職員の皆様と力を合わせて取り組んで参りたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新 森 修 一（アドミッションセンター副センター長 理工学研究科理学系教授）

学長補佐（入試統計担当）及びアドミッションセンター副センター長を担当しています。主に「入学後の学業成績の追跡調査」を担当していますが、報告書として、2015年度は「入試と入学後成績の追跡調査（対象：平成19年度及び23年度入学生）」を、2016年度は「同追跡調査（対象：平成22年度～24年度入学生）」を、2017年度は「同追跡調査（対象：平成23年度～25年度入学生）」を発行することができました。入試成績と入学後成績の関連性、単位取得数や卒業率等の全学的な傾向、各学部や学科等の特徴、その他、鹿大生の意外な一面なども記載されていますので、教職員の皆様に一読して頂ければ幸いです。

太 田 一 郎（アドミッションセンター兼務教員 法文学部教授）

入試担当学長補佐という立場で主に広報を担当しています。少子化の中で大学の方針に沿った優秀な人材を確保するためには、学生の入試と入学後の成績分析等を踏まえて入試制度を見直す必要があると考えています。現在、2020年度入試からの多面的・総合的入試の実施に向けてセンター教職員が一丸となって活動しておりますが、その実現のために、各学部の教職員の皆様にはより一層のご理解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

竹 内 正 興（アドミッションセンター 准教授）

鹿児島大学に赴任して4年目になります。好きな言葉は「半歩現実・半歩未来！」です。アドミッションセンターでは専任教員として教育・研究以外にも様々な業務に関わっていますが、アドミッションセンターの目的である基礎学力と進取の精神の素養を持った学生の安定的な確保のために仕事をしているという軸がぶれない様、常に「3現主義（現場に行く、現物に触れる、現実を知る）」を心掛けています。必要とされる人材となれるよう取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

アドミッションセンター

職員紹介

池田 淳之助（入試課長）

入試課は、学生部の組織として、事務職員 6 名、非常勤職員 2 名の体制で、大学入試センター試験、個別学力検査等の入試の実施、データの管理、入試広報等の業務を行っています。また、高大接続改革に対する対応、多面的総合的に評価を行う入試の導入や、鹿児島大学で学ぶこと、鹿児島大学の良さについて伝える広報活動については、アドミッションセンターとともに、一体となって取り組みを進めています。今後もなお一層、鹿児島における高等教育の拠点としての役割を果たすべく、目前の課題について、一つ一つ取り組んでいきたいと思ひます。

石 踊 保 広（入試課長代理(アドミッションセンター担当)）

「子は国の宝！」昨年 4 月に現職に赴任し、進学説明会や大学への高校訪問等を担当し、高校生に接する機会が多くなりました。これまで大人ばかりの世界で仕事をしてきたせいか、彼らのキラキラ輝く眼は大変まぶしく圧倒されてしまいます。そしていつも大学とは何か、どうあるべきかということを考えさせられてしまいます。まさに子は国の宝。子供達の未来に「幸せ」が、「仕合わせ（しあわせ）」〔人との素敵な巡りあわせ〕がたくさん訪れますように！

中 島 晃 一（入試課長代理）

アドミッションセンターが設置され 4 年目となり、その活動も年々充実してきているように感じております。これまで、主にアドミッションセンターの予算に関わる事務を担当していましたが、今年度は、広報活動等にも何回か参加し、受験生と直に触れ合う機会をいただきました。そこで本学の魅力を少しでも発信できていればなと思っています。課長代理としては今年度で最後になりますが、今後も何らかの形でお役にたてればと思ひます。

中 間 彩 加（アドミッションセンター事務補佐員）

アドミッションセンターの活動を支える業務を行う中で、自身の業務はもとより、アドミッションセンターの取り組み一つひとつが本当に多くの人に支えられていることを痛感しております。いつも支えてくださる方々への感謝の気持ちを忘れずに、業務に取り組んでいきたいと改めて思ひます。これからも微力ながらお役に立てるよう、精進して参りたいと思ひます。